平成三十年度　第百二十二回

京都大学書道部



日時　平成三十年　十二月十五日・十六日
　　十時～十七時（十六日は受付十六時まで）

場所　建仁寺
　　西来院・禅居庵

巻頭に寄せて

ひとくちに書作品といってもいろいろありますが、大きく分けると静的な作品と動的な作品の二つにまとめることができます。

静的な作品とは、字の間隔や大きさをすべて同じにしたり、線の調子を一定にしたりして「揃えて書く」作品のことです。楷書や隷書の作品に多く、特に字数の多い場合は正確さや高い集中力が欠かせません。歴史上の書跡でも、たとえば揺るぎない線で几帳面に書かれた唐代の楷書碑は、時が止まったような見事な美しさをもっています。

もう一方の動的な作品はその反対、つまり「変化させて書く」方法によるものです。これは行書・草書によくみられる方法で、字の配置や大きさ、形、くずし方、潤渇（にじみとかすれ）など、さまざまな要素の変化を自在にコントロールする必要があります。変化の妙を楽しめる書道史上の作品の一つ、蘇軾の『黄州寒食詩巻』の場合、字の大きさに最大で約十倍もの違いがあります。

では、相反する性格をもつ二種類の作品たちの美しさを、同じ観点から説明することはできるのでしょうか。

その鍵は、人間の手で書くことの特質にあります。字がぴたりと揃っていることに価値を見いだすのは、手で書く文字がそもそも変化していくことを免れないからです。逆にその変化を意識的に制御して利用すると、生き生きとした動きのある作品をつくることができます。

唐代に書かれた最も有名な書論のひとつである『書譜』で、著者の孫過庭は、楷書と草書を対比しつつもそれらの共通性を指摘し、王羲之が優れているのはその双方に通じていたからだと述べています。書には二種類の異質な魅力があること、しかしその本質は同じであるということを、孫過庭は見抜いていたのでしょう。

さて、この度も書展を無事に開催できるのは、顧問の宇佐美文理教授と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとする多くの方々のご支援とご協力のおかげです。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

来場者のみなさま、本日は私たち京都大学書道部の冬樟展にお越しいただき、まことにありがとうございます。「静的」と「動的」、双方の作品を見比べながらお楽しみいただければ幸いです。

平成三十年十二月吉日

京都大学書道部　部長　石本森羅

旧部室の思い出

行友三輪子（書道部ＯＧ・京都大学人文科学研究所図書掛主任）

現在、京大書道部は、西部講堂横の新しい部室棟で活動しています。その前はどうだったか？　私の思い出を記します。

旧部室は、吉田寮横の「学生集会所」にありました。明治時代の二階建ての木造建築で、十弱の部室があったようです。冷暖房なし、トイレも使えないのが欠点でした。

書道部の部室があったのは、一階北側の中央部分。隣の囲碁部とは薄い仕切りを隔てただけで、会話は筒抜けでした。

部屋は六畳程で、一人か二人が練習するのがやっとの広さです。二階の民族舞踊研究会が激しいステップを踏むたびに、天井の塗料がパラパラと降ってきました。

部屋の北側には、コタツとテレビ。コタツは唯一の暖房器具かつ寝具でした。テレビは主にゲーム用で、深夜になると先輩が「どうぶつの森」か「桃太郎電鉄」に没頭していました。

西側の本棚に並んでいたのは、書道本、部誌、アルバム、なぜか「ベルばら」。当時は部誌（手書きのノート）で連絡事項を伝えていたので、部室に来るとまず部誌を読みました。

東側の壁には、筆が画鋲で留められている他、部員の写真が貼り付けられていました。ここに写真を曝されるようになると、自分も書道部に馴染んだなあと変な感慨がありました。

毎週水曜日は一階南側の大部屋を借りて、部員が一同に会して練習に励みました。書道部は畳をすぐ墨で汚すので散々注意を受けましたが、やはり汚していました。七夕の鍋パーティーも恒例行事でした。

特に冬は寒さがこたえ、寺本先生が「冷蔵庫の中にいるようだ」と震えてらっしゃったのを覚えています（申し訳なかったです……）。

このように旧部室は狭くてオンボロでしたが、何でも許される気安さと愛着があり、いつも誰かが「住んで」いました。現在、学生集会所は取り壊されています。

部室は部員を写す鏡。今の部室はどんなところか、ぜひ部員達に尋ねてみてください。



「学生集会所」外観


大部屋（七夕鍋）

生活の中の書から……

寺本蒼玄（京都大学書道部技術顧問）

私達が日常目にする書作品は数多くありますが、皆さんはいくつ見つけられますか。

まずは手紙や葉書、これは、筆を使ったり、筆ペンやボールペン、万年筆で書かれていますが、書かれた文字にその人の個性が出ていて、なかなか面白い作品だと言えると思います。

書道を習っている人達は、古典やお手本を習う事により、美しくきれいに読み易い字を書けるようにと思っているでしょう。

こういう実用的な物と違って、部屋を飾る作品とか、展覧会に出す作品となると、今度は見る側、いわゆる鑑賞する人の立場になって、作品を創らなければと思います。自分はこの作品を創る時、内容をどの様に表現するか、又、どう表現すれば自分の思いが見る人に伝わるか、これはなかなか難かしい問題で私自身も悩むところです。

自分の身近なところに見つかる書作品を見て、色々な表現の参考にしてみるのもいいと思います。

看板、本や映画のタイトル等いろんなものをたくさん見て感じて、これからの作品創りに生かしていって下さい。

臨書と創作

○臨書

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは、古典の字形や用筆に迫ろうとする、「形臨」と呼ばれるものです。形をまねることは、その古典に迫る最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われ、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップとなります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品から学ぶことを基盤としています。書道における基本と呼べるものが、臨書なのです。

○創作

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句や詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の主張や個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られる様々な表現方法を用いることで、作品に味わいや深みを出すことが出来るようになります。

○法帖

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本をとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の冬樟展では、各臨書作品の右横に臨書した箇所の法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしています。

作品鑑賞の参考に、こちらも是非ご覧ください。

書体について



『篆書』
漢字のもっとも古い形で、現在使われている漢字のもとになった字体です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。均一な太さの線が特徴です。



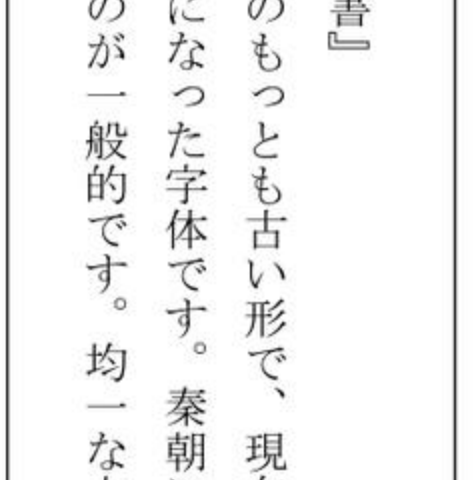
『隷書』
役人が複雑な字形だった篆書を早書きした際生まれた字体です。字形は横長で、時代が進むにつれ、線の終わりに独特な「波磔」がみられるようになります。



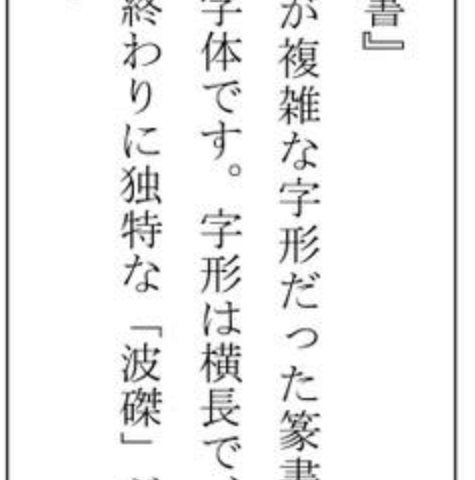
『楷書』
隷書からさらに記号化された、バランスの取れた字体です。その整った字形から、現在の漢字の基本とされています。



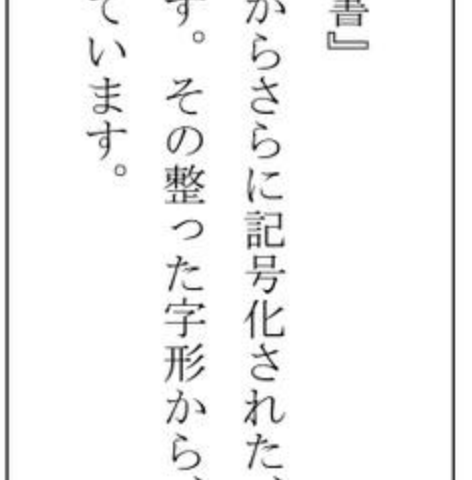
『行書』
隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や点画の流れが最も重視される書体といえます。



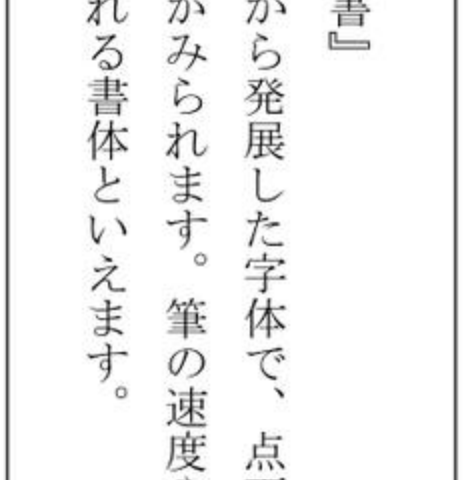
『草書』
隷書を早書きすることから発展しました。線の省略や筆順に変化があり、自由度の高い作品となります。文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。



『かな』
日本独特の表音文字です。草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。



『調和体』
日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものです。漢字かな交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。



書家説明集

文責:大橋 葵

部員が今回の書展で臨書している主な書家に関する説明を集めました。何百年も前の時代を生きた書家に思いを馳せながら作品を見るための参考にしていただければ幸いです。

☆王羲之(303?-361?【東晋】)

「書聖」と呼ばれ、楷行草いずれの書体にも長けていました。唐の太宗にもその字を気に入られたと言われています。残念ながら王羲之本人が書いたとされる真蹟は残っていませんが、**『蘭亭序』**(臨:原, 村上)や**『十七帖』**(臨:岩田)、**『集字聖教序』**(臨:北田)など多くの書の写しが伝わっています。

＊その他の臨書作品:牛田, 秋友

☆褚遂良(596-658【唐】)

欧陽詢(臨:中林)、**虞世南**と合わせて初唐三大家と言われるうちの一人です。王羲之の書を学びました。起筆の逆筆、線の太さや抑揚が特徴で、彼の書法は褚法と呼ばれることもあります。代表作には**『雁塔聖教序』**(臨:平野, 野口)などがあります。

＊その他の臨書作品:中村(直), 金岡

☆顔真卿(709-785【唐】)

顔法と呼ばれる、たっぷりとした送筆を特徴とする独特の表現を生み出しました。**『多宝塔碑』**(臨:小野)では起筆で蚕の頭のようなこぶを描き、終筆では燕の尾のように極端に太くなった後に力を緩める「蚕頭燕尾」という書き方が見られます。また、**『争坐位稿』**(臨:吉田)、**『祭姪文稿』**、**『祭伯文稿』**の三稿は顔真卿の行草書の傑作として知られています。

☆米芾(1051-1107【宋】)

宋の四大家の一人として知られています。王羲之を始めとする晋・唐時代の名蹟を収集し、臨書に励み、ついには独自の書風を打ち立てました。行書の**『蜀素帖』**(臨:郡, 中岡)は、起筆から終筆まで慎重に書かれているのが魅力です。潔癖症で変わり者と言われた米芾らしさが出ていると言えるのではないでしょうか。

☆王鐸(1592-1652【明～清】)

明末清初の時代の最も傑出した書家といわれています。詩画文書すべてに評判が高かったと言われます。特に書においては、字と字が繋がっている連綿が多く見られる、流れるような行草書が魅力です。明と清の両方に仕えたために中国ではあまり評価は高くありませんでしたが、日本においては絶大な人気を誇っています。

＊臨書作品:荒巻, 上西, 角, 服部

☆趙之謙(1829-1884【清】)

楷書、行書、篆書、隷書、篆刻とあらゆるものに優れていました。**鄧石如**(臨:藤井, 森)に篆書を習ったとみられますが、それに加えて北魏の様式も取り入れて、新たな方法を切り開いたと言われます。**『氾勝之書』**(臨:小笠原)では強い起筆や北魏風の横画などから力強さが感じられます。

＊その他の臨書作品:今村, 覚道, 建部

【参考文献】 『書家 101』 石川九楊・加藤堆繁, 新書館, 2004 年 『書の歴史－中国篇』 二玄社, 1960 年

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄
　創作・『温故而知新』……10
　創作・『徳有鄰』……10

一回生

秋友祥香
　臨書・王羲之『興福寺断碑』……19
伊藤迅亮
　創作・『熱願冷諦』……19
岩田恵理子
　臨書・王羲之『十七帖』……28
小笠原萌葉
　臨書・趙之謙『氾勝之書』……20
岸根葵葉
　臨書・作者不詳『乙瑛碑』……30
北田綾
　臨書・王羲之『集字聖教序』……30
坂崎亜実
　臨書・作者不詳『礼器碑』……22
柴田達哉
　臨書・作者不詳『曹全碑』……31
洲鎌英行
　臨書・劉墉『文語幅』……31
杉山太郎
　臨書・伝小大君『香紙切』……31
鈴木和樹
　臨書・趙孟頫『楷書玄妙観重脩三門記巻』……31
野口直哉
　臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……24
服部佳乃子
　臨書・王鐸『行書幅』……33
渡部裕貴
　臨書・橘逸勢『伊都内親王願文』……26

二回生

石本森羅
　創作・『贈劉景文』……11
　臨書・作者不詳『崔敬邕墓誌銘』……27
市川拓真
　臨書・沈周『題諸葛武侯像詩』……19
鵜川大輝
　創作・『春宿左省』……12
牛田聡実
　臨書・王羲之『九月三日帖』……28
大橋葵
　臨書・俞和『自書詩』……28
越田真由
　臨書・細井広沢『西湖十景』……19
近藤佑香
　臨書・作者不詳『虢季子白盤』……19
坂本和歌子
　創作・無題……28
寺田奈津美
　臨書・智永『真草千字文』……28
中岡大吉
　臨書・黄道周『七言絶句幅―山居有作―』……14
中林亮
　創作・『サヨナラダケガ人生ダ』……22
野田恵子
　臨書・米芾『蜀素帖』……21
松尾有輝也
　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……30
安田直記
　創作・『山中示弟』……21
吉田凌祐
　臨書・趙孟頫『秋興八首』……28

三回生

安達光寿
　臨書・傅山『七言絶句幅』……25
覚道直治
　臨書・顔真卿『争座位稿』……34
勝野初紀
　臨書・伝小野道風『継色紙』……24
金岡杏祐
　臨書・張瑞図『杜甫飲中八仙歌巻』……33
金山優作
　臨書・趙之謙『隷書張衡霊憲四屏』……15
建部壮一郎
　臨書・楊峴『臨西狭頌』……32
中村勇真
　臨書・褚遂良『文皇哀冊』……29
狭間優美
　臨書・何紹基『蘇軾　種松法』……29
一二暉生
　創作・『あだし野』……13
平井達也
　創作・『冬の朝』……29
　臨書・趙之謙『急就篇』……20
　臨書・盧中南『南郷子　登京口北固亭有懐』……13
　臨書・作者不詳『蘇慈墓誌銘』……27
　臨書・良寛『草庵雪夜作』……15
　臨書・徐三庚『出師表』……32

別府華　臨書・比田井天来『無功徳』……34
村上友梨　臨書・王羲之『蘭亭序』……25
森ちひろ　臨書・鄧石如『周銘横披』……35

四回生

阿部朱夏　創作・『寒翁馬』……19
今村朱里　臨書・趙之謙『隷書開元占經』……27
小野日菜乃　臨書・顔真卿『多宝塔碑』……28
郡健一郎　臨書・米芾『蜀素帖』……21
米田景　創作・『古事記』……30
阪井田有紗　臨書・村上三島『秋田山中』……14
角裕介　臨書・王鐸『臨王羲之秋月帖』……22
橘大輝　創作・『春望』……32
仲村康太郎　創作・『愛』……23
中村直樹　創作・『李賀「感諷五首」より其四半四句』……24
橋詰都　創作・『米芾のことば―「海岳名言」より』……32
原誠人　臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……24
原田拓実　臨書・褚遂良『楷書千字文』……33
平野晶子　創作・『暮雲春樹』……33
創作・『勧酒』……16
創作・『眞理』……34
臨書・王羲之『蘭亭序』……34
創作・『源氏物語巻名歌「少女」』……25
臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……17

五回生

岡本晴香　創作・『ドンマイ』……20

修士二回生

矢野凱己　創作・『春を待つ』……34
山科直也　創作・『スピカ』……35

修士一回生

荒巻拓哉　臨書・王鐸『臨王羲之闊別帖』……19
上西隆太　臨書・王鐸『家中南澗作』……27
白谷暢浩　創作・『玉響』……28
宗哲仁　創作・『花開還更新』……21

博士課程修了

藤井基弘　臨書・鄧石如『白氏草堂記』……30

合作

鵜川大輝／越田真由／松尾有輝也　創作・『篆書パッチワーク』……14
木下有羽／矢野凱己／山口和樹／野田恵子　創作・『環』……22
小林由佳／平野晶子　創作・『践修厥猷、春日憶李白』……32

二回生合作　創作・『くじ引き書道』……11
四回生合作　創作・『闊歩』……12
全体合作　創作・『平成三十年間を振り返ろう』……31
　　23
　　36
　　25
　　37
　　37
　　36
　　26
　　26
　　26

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品



『温故而知新』
「故きを温ねて新しきを知る」
力強く堂々とさせるため、張瑞圖風にやや太く書き上げました。

○禅居庵作品



『徳有鄰』
「徳は鄰有り」
落ち着いた雰囲気を出すために、趙之謙風にゆったりと仕上げました。

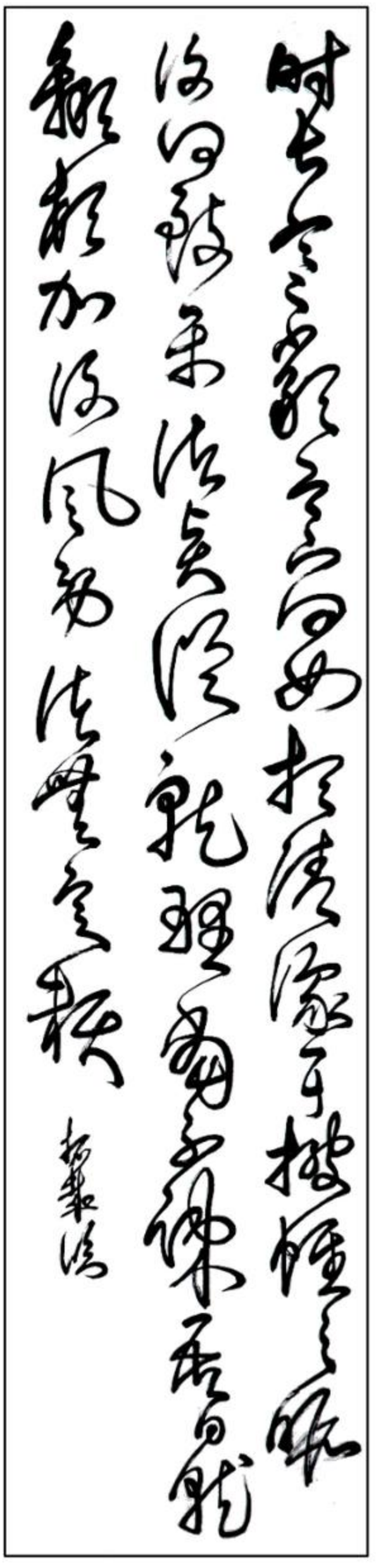
○西来院

1

荒巻拓哉　修士二回生

臨書　草書　王鐸『臨王羲之闊別帖』　二尺×八尺

「時長寒厳足下何如想清豫耳披懐之暇復何致楽諸賢従就理當不疎吾日就羸頓加復風労諸無意頼」最後の書展出品となった今回は、原点回帰で王鐸の臨書です。やはり王鐸の草書は楽しい！



2

石本森羅　二回生

創作　行書　『贈劉景文』　二尺×六尺

「荷盡已無擎雨蓋。菊殘猶有傲霜枝。一年好景君須記。正是橙黄橘綠時。」

初冬の風景を詠んだ蘇軾の詩を、蘇軾の書風で書きました。芯の通った線を引くことを意識しました。





3

上西隆太　修士二回生
臨書　行草書　王鐸『家中南澗作』　二尺×八尺

「家硎誰登眺。天寒草木稀。雨餘孤岫出。日莫衆禽依。諸寇〈郡〉郡〈寇〉仍緊。三年人未歸。石壇偃臥否。處々野棠飛。王鐸。」

明末～清初の中国を代表する書家、王鐸による自作五言律詩の長条幅作品を臨書しました。二行目の五・六文字目、「寇郡」がついているのは、ここが「郡寇」の誤りであるためだそうです。王鐸自身がそう書いているのであって、私が書き間違えたわけではありませんの



4

鵜川大輝　二回生
創作　行草書　『春宿左省』　二尺×八尺

「花隠掖垣暮。啾啾棲鳥過。星臨万戸動。月傍九霄多。不寝聴金鑰。因風想玉珂。明朝有封事。数問夜如何。」

寒さの辛い季節になりました。春が待ち遠しいです。今回、杜甫の「春宿左省」の創作をしました。悩み悩み、色々な作品を参考にしては迷い迷い作りました。それが楽しく面白く、難しいなと改めて思いました。

5

覚道直治　三回生
臨書　隷書　趙之謙『隷書張衡霊憲四屏』　二尺×八尺

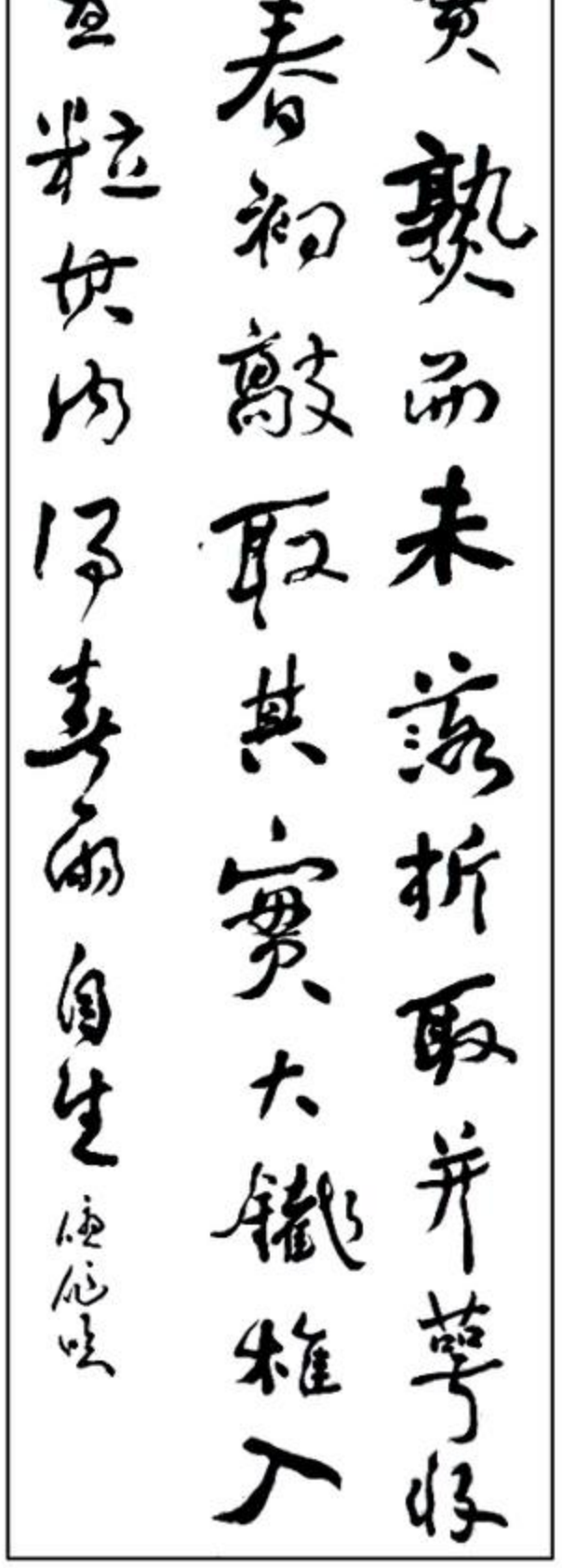
「太素之先幽清元靜寂寞……（略）」
僕の体型とは正反対の重厚な線質に惹かれました。最近は毎日ラーメンを食べてデブ活してるんですが、一文字目の「太」みたいな逞しいボディーを手に入れたいですね。



6

金山優作　三回生
臨書　行書　何紹基『蘇軾　種松法』　二尺×八尺

「冬至以前。松實熟而未落。折取。……（略）」
何紹基を書きすぎて、いい加減コメントで書くことがなくなりました。



7

阪井田有紗　四回生
臨書　行書　村上三島『秋日山中』　二尺×六尺

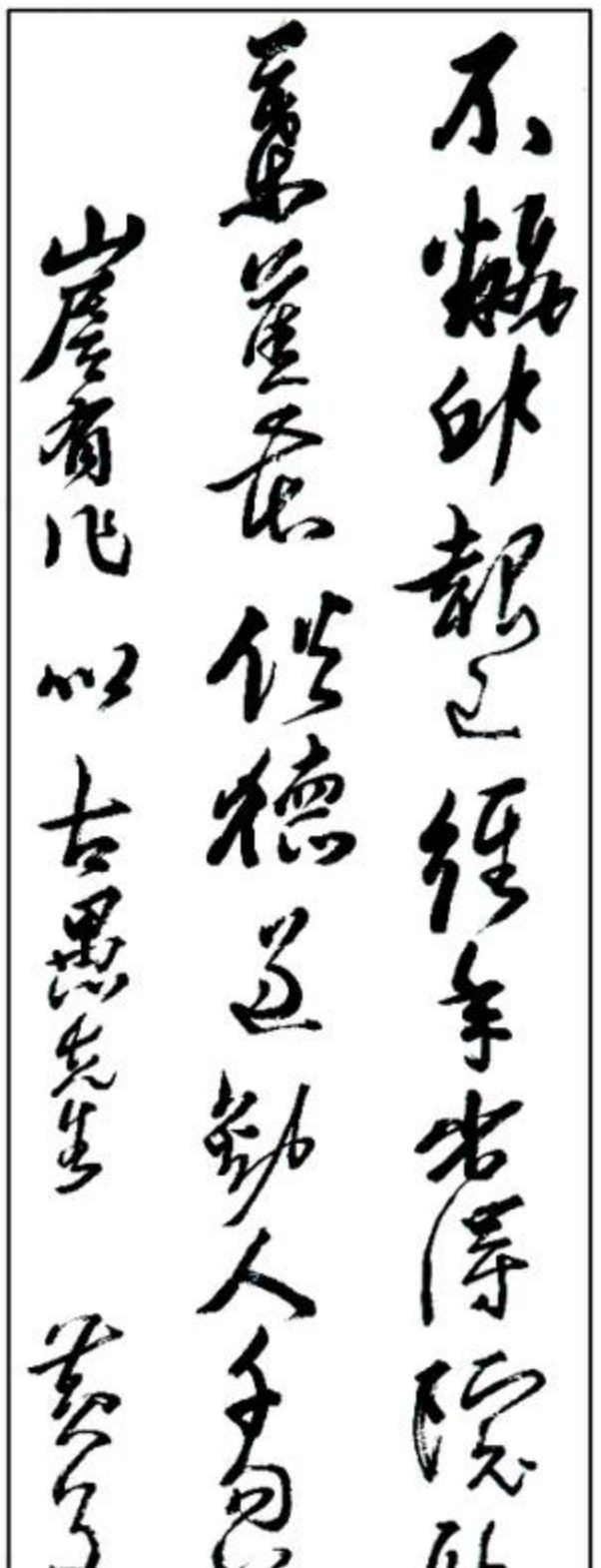
「山澤含霧雨偶来若居夸我無遠游志何與親愛離暑限初可喜秋来轉堪悲壮顔豈草木」
ここで過ごす最後の冬なのに、季節外れの作品を選んでしまいました。時よ止まれ、と願う気持ちが、思わずして出てきちゃったんですかね。



8

寺田奈津美　二回生
臨書　草書　黄道周『七言絶句幅ー山居有作ー』　二尺×八尺

「不翻邱報已年、省得院頭爛帋錢。櫟葉蕉花佚徳過、勸人千句惹松烟。山居有作。」
初めてこんなに大きな作品を書けて、楽しかったです。いろいろな書体、大きさの作品に挑戦してみたいと思うきっかけになりました。





9

中岡大吉　二回生
創作　篆書・調和体　『サヨナラダケガ人生ダ』　一尺×八尺　二連

「勧君金屈巵　満酌不須辞　花発多風雨　人生足別離　／コノサカヅキヲ受ケテクレ　ドウゾナミナミツガシテオクレ　ハナニアラシノタトヘモアルゾ。『サヨナラダケガ人生ダ』ダケガ人生ダ。」
「ほなまた。」



10

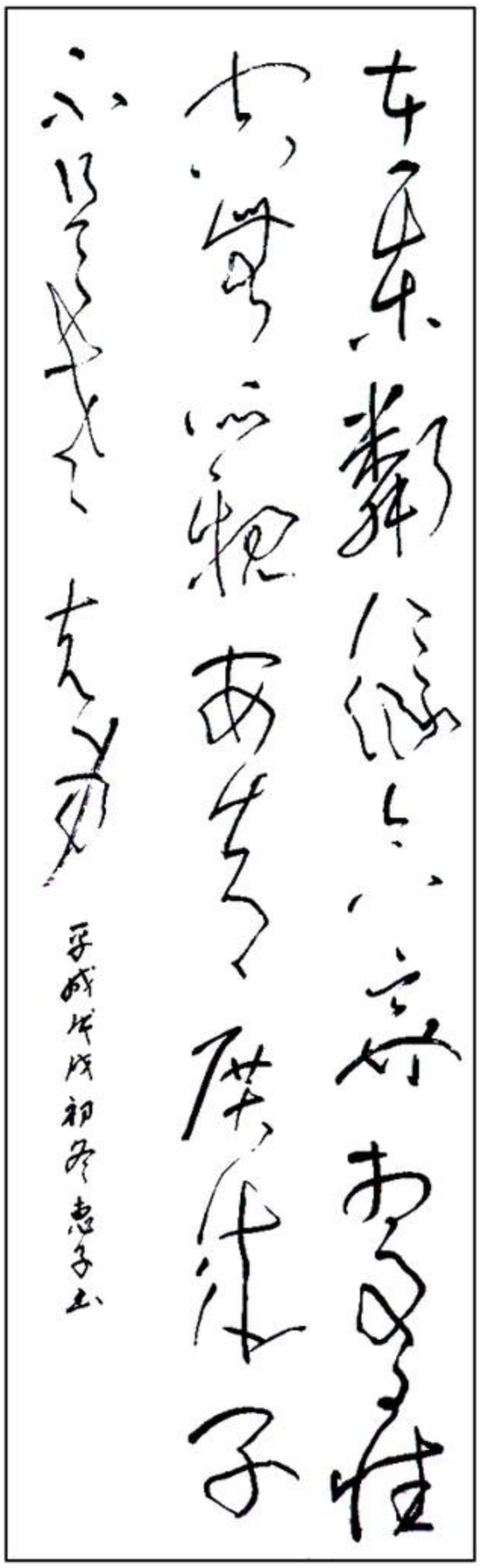
中村勇真　三回生
創作　行書　『江南旅情』　二尺×八尺

「楚山不可極歸路但蕭條海色晴看雨江聲夜聽潮劍留南斗近書寄北風遙爲報空潭橘無媒寄洛橋」
正統派の作品が好きで、そのような創作をしてみたいものですが、未熟故に「俗っぽい字」を書いてしまいます。まだまだですね。

11

野田恵子　二回生
創作　草書　『山中示弟』　二尺×六尺

「在東鄰縁合妄相有性空無所親安知廣成子不是老夫身」
遊び心のある作品を目指して書きました。



12

原誠人　四回生
創作　草書　『勧酒』　二尺×八尺

「勧君金屈巵、満酌不須辞。花発多風雨、人生足別離。」
半時も経つと話題も途切れ始める。覚えず、要らぬ考が浮んで来て、尚更話し出せなくなる……。店は良く温っていたが、何か春寒が身にしみるような心持がした。「……なあ」原が猪口を見詰めたまま（柄にも無く涙等浮べ乍ら）ぽつと云う、「今日は好い日だ。一つ、惜別と洒落込ませてくれないか」―そんな演技としての書。



13

平野晶子　四回生

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　一・五尺×八尺　二連

「大唐三蔵聖教序太宗文皇帝製蓋聞二儀有象顕覆載以含生……（略）」

この古典に出会ったのは二回生の時のこと。初めて法帖を開いたときに感じた線の色気がどうしても忘れられず、性懲りもなく今ました。臨書する中で何度でも新鮮な発見があり、ドキドキさせられ続けた二年半でした。今にも踊り出しそうな線を感じて頂けているでしょうか。



14

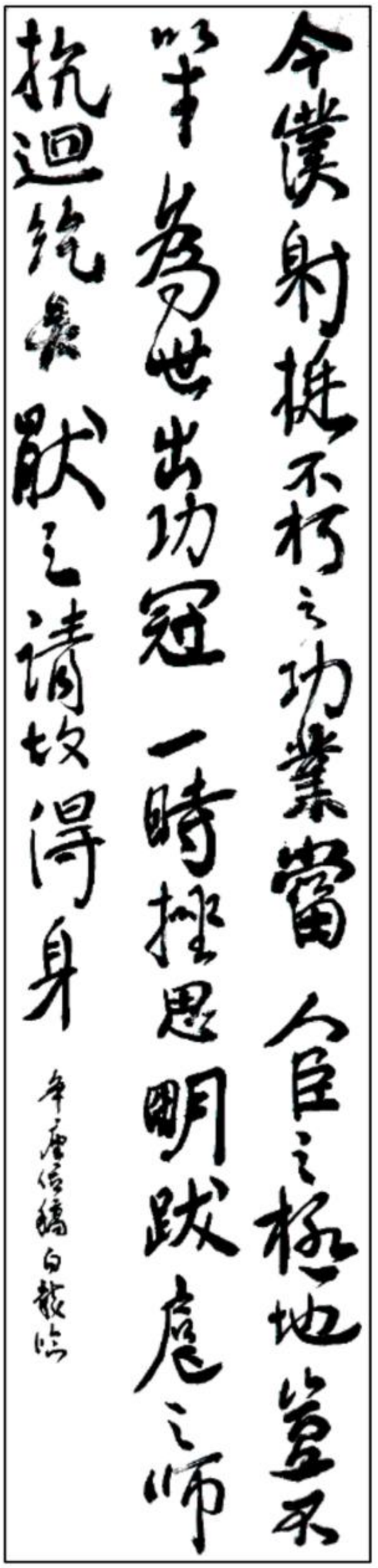
安田直記　二回生
臨書　草書　傅山『七言絶句幅』　二尺×八尺



「龍王社鼓鬧村雩抛卻殘書也扶杖愁無角牴酬花眼誰好鏖糟俯灶觚」
何枚も書くうちにわけ分からんようになっていきました。とりあえず、格好良く書ければセーフだと思っています。

15

吉田凌祐　二回生
臨書　行書　顔真卿『争座位稿』　二尺×八尺



「今僕射挺不朽之功業。當人臣之極地。豈不以才為世出。功冠一時。挫思朗跋扈之師。抗廻紇無猒之請。故得身（晝凌煙之閣。）
争座位稿（争坐位文稿）は「三稿」と呼ばれる顔真卿が文章を練った際の草稿の一つであり、その内容は右僕射の郭英乂への抗議文です。顔真卿の力強さに魅せられてこの争座位稿を書いています。王羲之系とは異なった顔真卿の魅力、是非堪能してください。

16

秋友祥香　一回生
臨書　行書　王羲之『興福寺断碑』　半切

「樹德務滋循躬成脩乃奏乞骸骨身歸常樂詔許」
パフォを始めて行書を書く機会が増えたので行書を選びました。



17

阿部朱夏　四回生
創作　隷書・篆刻　『顧日々』　半紙横

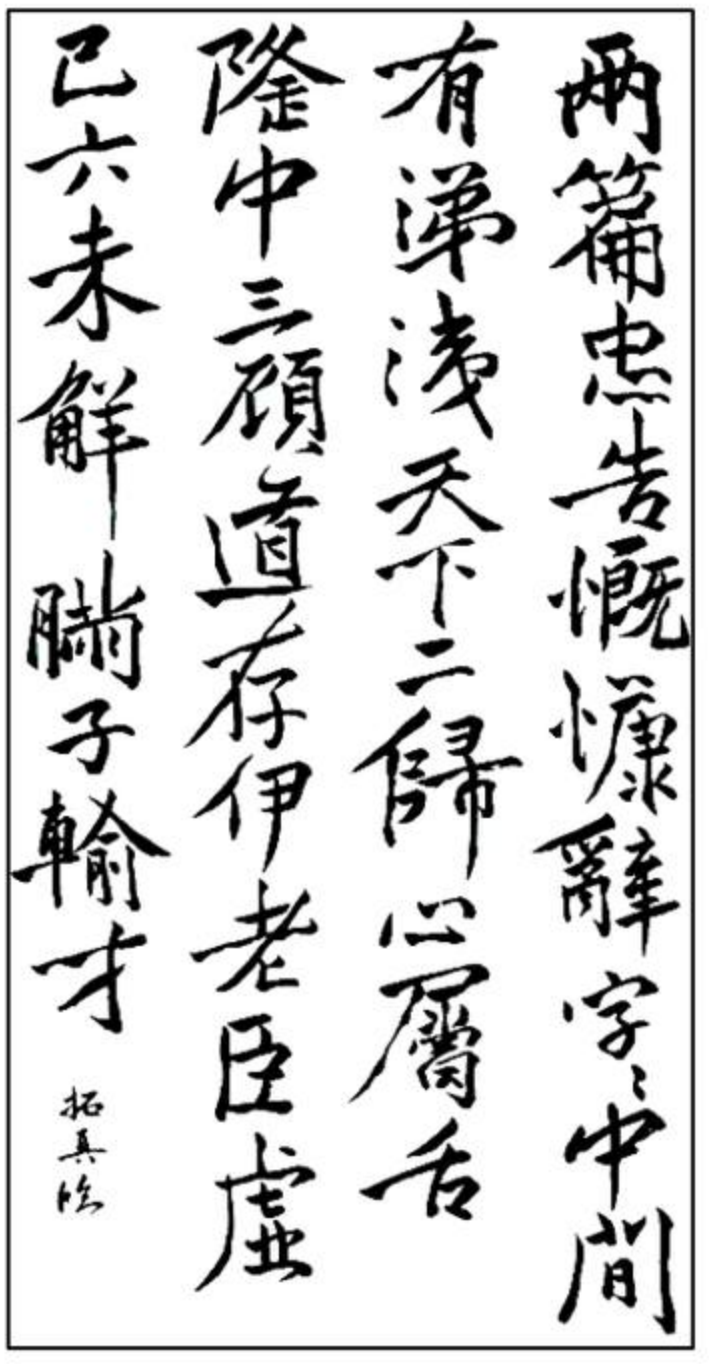
「温風起東谷和氣振柔條波乱万丈　順風満帆時難得而易失　心雖悔而何追」
気がつけば卒業制作らしいです。一応集大成ということで、やはり自分の好きな書体で、初めてきちんと創作をしてみます。私の大学生活、ひいては人生を表すとすれば波乱万丈かなぁと思い、それを軸に言葉を集めました。

NO IMAGE

18

市川拓真　二回生
臨書　行書　沈周『題諸葛武侯像詩』　全紙

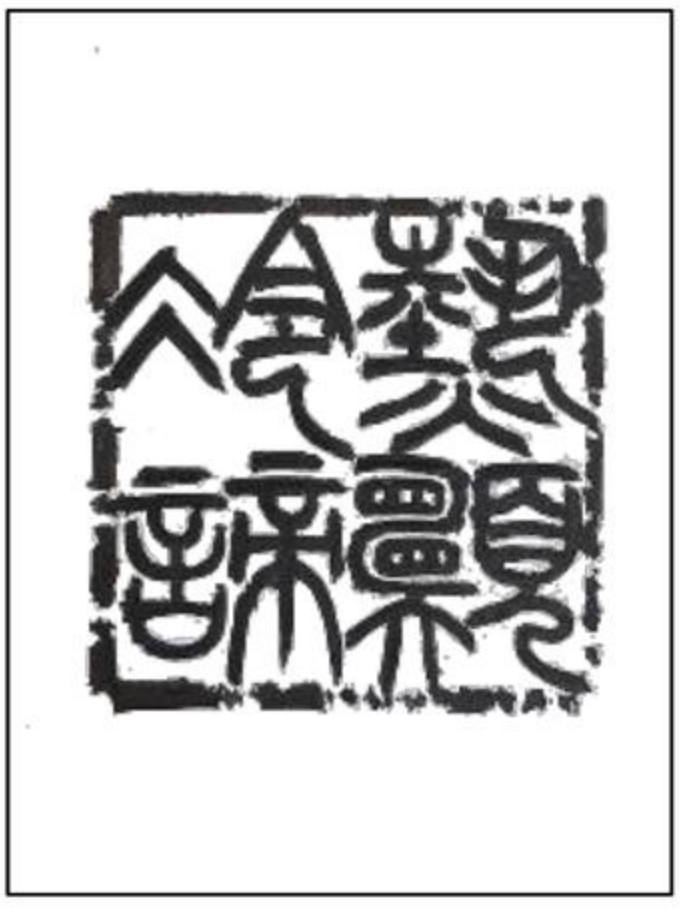
「兩篇忠告慷慨辭字字中間有涕洟天下二歸心屬呂隆中三顧道存伊老臣虚己六未解瞞子輸才」
初の全紙作品に全身全霊で取り組みました、全紙だけに。



19

伊藤迅亮　一回生
創作　篆刻　『熱願冷諦』

「熱願冷諦」
熱心に願い求めることと、願い求める対象を冷静に観察して本質を明らかにすること。ホットなスピリットでクールにエッセンスをペネトレイトしたい。



20

小笠原萌葉　一回生
臨書　楷書　趙之謙『汜勝之書』　半切

「和解夏至天氣始暑陰氣始盛土復」
農学部っぽい法帖を選びました。どことなく夏の甲子園を思わせる文字が多かったので、炎天下の白球を思って書いてみました。楽しかったです！



21

勝野初紀　三回生
臨書　隷書　楊峴『臨西狭頌』　53cm×35cm

「朝無秕政直哉惟清出統華夏化……」
隷書って良いんですよ。ほんと。たのしいです。



22

岡本晴香　五回生
創作　調和体　『ドンマイ』　二尺×六尺横

「日々の中で必ず訪れる……」
最近は筆を持つ時間も少なくなってしまいましたが、それでも書道は続けていこうと思っています。いつか自分でも納得のできる作品を書きたいものです。



23

郡健一郎　四回生
臨書　行書　米芾『蜀素帖』　半切

「断雲一片洞庭帆玉破鱸魚霜破柑好作新」

どうしても研究に時間をとられてしまう日々、ふとした時に書道部で過ごした日々を思い出します。書道部を通して生まれた出会いや部員と共有できた時間に思いを馳せると、懐かしさと寂しさが込み上げてくると同時に、改めて自分は書道が、そして書道部が好きなんだと感じさせられます。



24

近藤佑香　二回生
創作　行書　半切

「日暮蒼山遠天寒白屋貧柴門聞犬吠風雪夜帰人」

創作と言ってもある作品を参考にして書き上げたものです。線の強弱を意識しながら書いたつもりですが、なかなかうまくいかないものです。

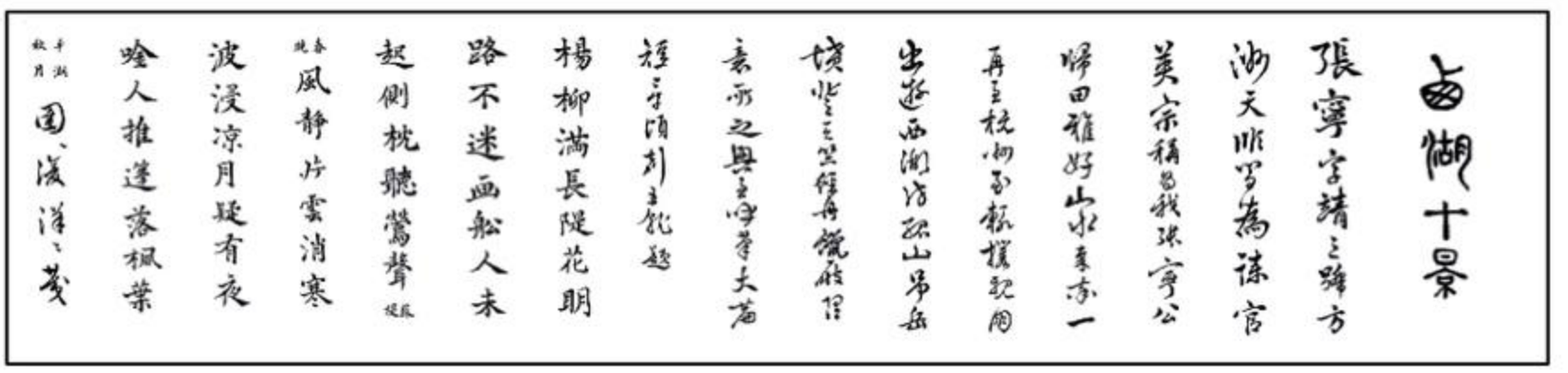


25

越田真由　二回生
臨書　篆書・隷書・楷書・行書・草書　細井広沢『西湖十景』　巻子

「西湖十景□張寧字請之號方……」

たくさん書きました。



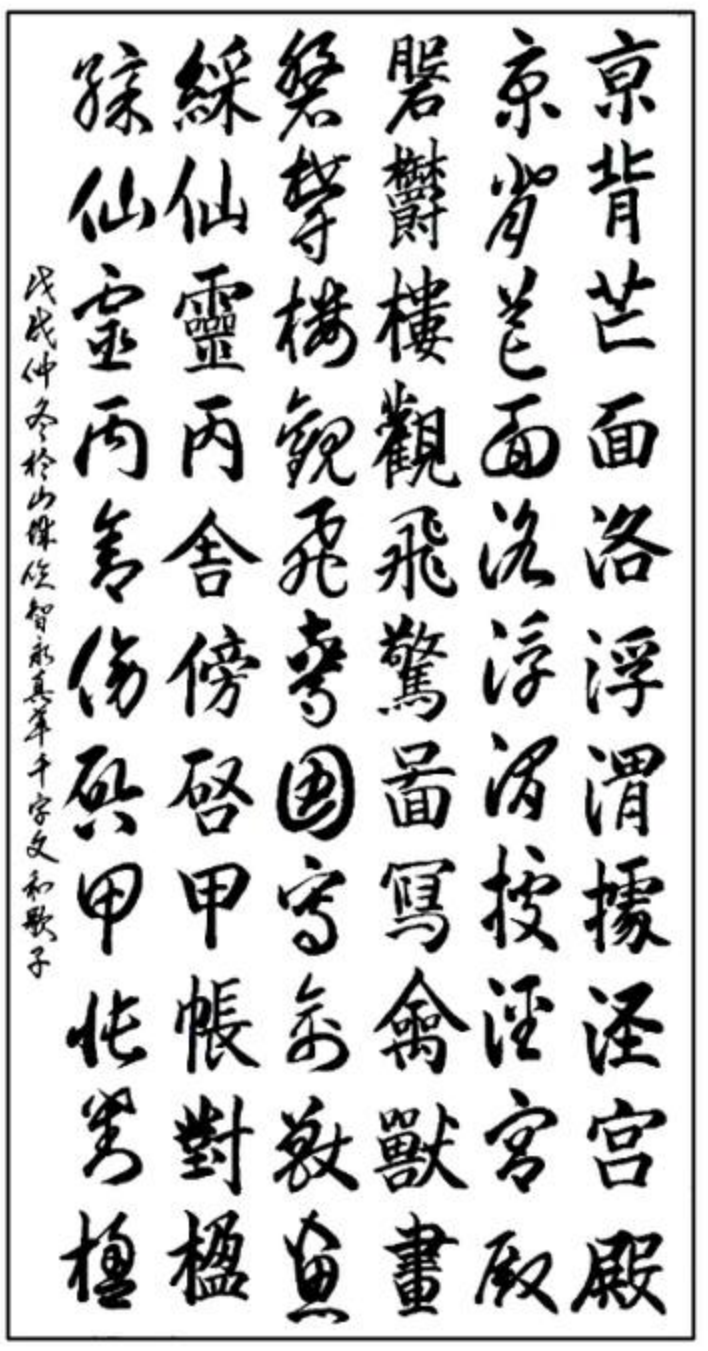
26

坂本和歌子　二回生

臨書　楷書・草書　智永『真草千字文』　全紙

「京背芒面洛浮渭據涇宮殿……」

楷書と草書どちらも書けるという欲張りな所に惹かれて選びました。多字数の楷書はもうやらないと思っていたのですが、楷書の魅力には抗えませんでした……。二つの書体をまとめるのが難しかったです。



27

柴田達哉　一回生

臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　半切

「豊年農夫織婦百工戴思縣前叭河平元年遭白茅谷水災害退於戌亥之間興造城郭」

人生初書道作品。



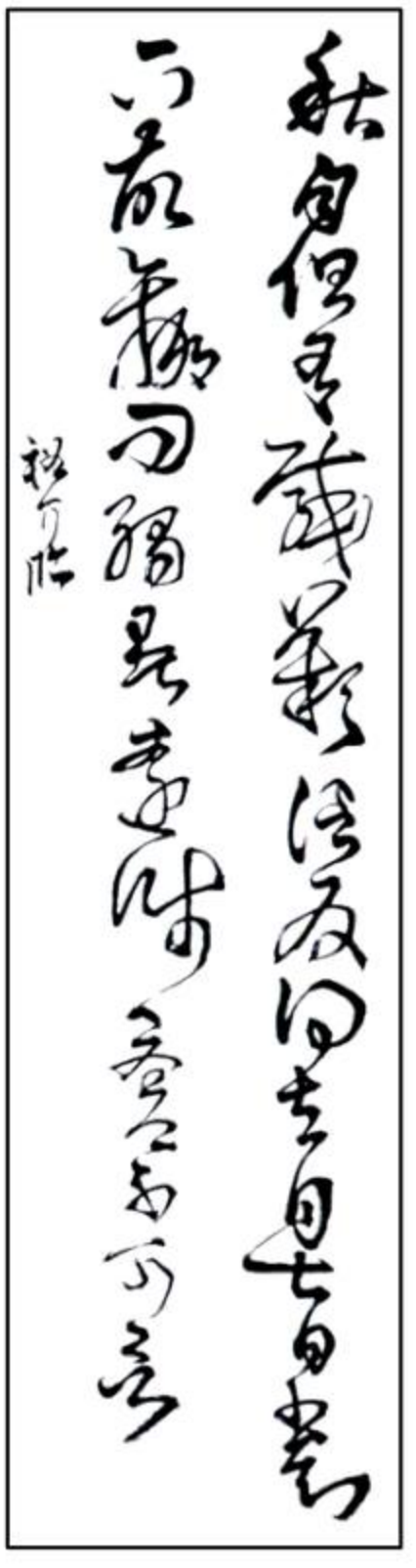
28

角裕介　四回生

臨書　草書　王鐸『臨王羲之秋月帖』　半切

「秋月但有感歎。信反。得去月七日書。知(足)下故贏(疾)問。觸暑遠渉。憂卿不可言。」

王羲之の作品を王鐸が臨書した作品を臨書しましたが…まだまだ王鐸らしさを引き出す改善の余地ありといったところです。釈文の（　）は王鐸の作品での脱字です。



29

宗哲仁　修士二回生
創作　行草書　『花開還更新』　半切横

「花開還更新」
去年と同じ花が咲くことがないように、どんなに色濃い世代があっても、翌夏には全く個性の違う世代が書道部を彩っています。来年も、そのずっと先もまた、書道部に新しい花が咲くことを願っています。



30

中林亮　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切

「維貞觀六年孟夏之月。皇帝避暑乎九成之宮。此則隨之仁壽宮也。冠山抗殿。絶壑為池。」
この法帖を臨書するのは五年ぶりで、懐かしさを感じながら書きました。



31

仲村康太郎　四回生
創作　篆書　『愛』　色紙

「愛」
愛とは何か？漢字の成り立ちに基づけば、原義は、「ふりかえりつつ歩く、ひいて、心にかける意」であるという（『新字源』より）。私見を交えれば、要するに一目惚れの類であろう。一瞥で心ひかれるというのは鋭敏な感性でもある。書もそう、一見して「エエ字やな」と分かる感性を磨きたいし、そういう字を書きたい。



32

仲村康太郎　四回生

創作　行草書　李賀『「感諷五首」より其四半四句』　半切

「星盡四方高　萬物知天曙　已生須己養　荷擔出門去」

唐代の詩人李賀の五言律詩から前半四句のみ取った。敢然たる生き様が読み取れ、この四句だけでも十分詩になる。訳：星はすべて沈み、四方の暗黒の垂れ幕が上がってゆく。万物は、夜が明けるのを知った。すでに生まれてきたからには、自分で食わねばならず、荷物をかついで、門をでてゆくのだ。―『中国詩人選集14』より



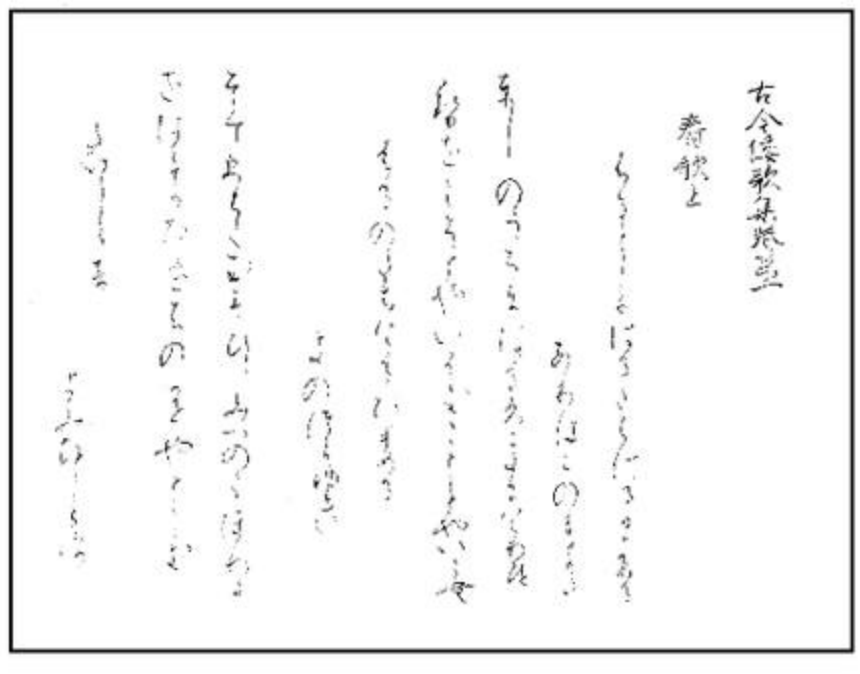
33

中村直樹　四回生

臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　巻子

「古今倭歌集巻第一　春歌上　ふ(不)るとしに(尓)はるた(多)ちける日よめる……（略）」

卒業すればおそらく書道をすることはないので、最後はなじみのある作品を書いて終わろうと思います。かな作品はいくつか練習しましたが、個人的に『第一種』が一番いい感じです。初めて書いた二回生の頃より上達していればよいのですが。



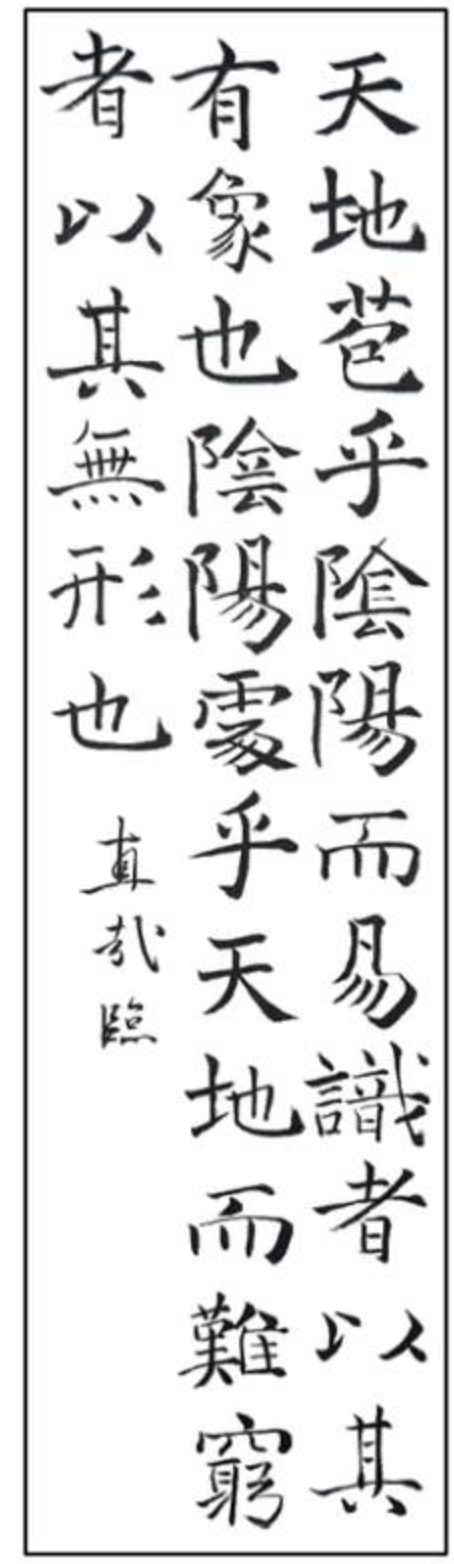
34

野口直哉　一回生

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切

「天地苞乎陰陽而易識者以其有象也陰陽處乎天地而難窮者以其無形也」

天地とか陰陽とか、なんかそういうのが好きです。精神年齢が低いんですかね。でも若いに越したことはないので、今後もこんな感じでいきます。



35

挟間優美　三回生

臨書　楷書　作者不詳『蘇慈墓誌銘』　聯落

「公諱慈、字孝慈、其先扶風人也。九曲靈長、河流出積石之下、十城側厚、玉英産……（略）」

キリッと鋭く精緻な字を墓誌に刻まれた蘇孝慈という人は、隋の時代の軍人だったそうです。なんとなく字の特徴と蘇孝慈の姿が重なる気がして、書いている間は気を抜けない緊張感がありました。



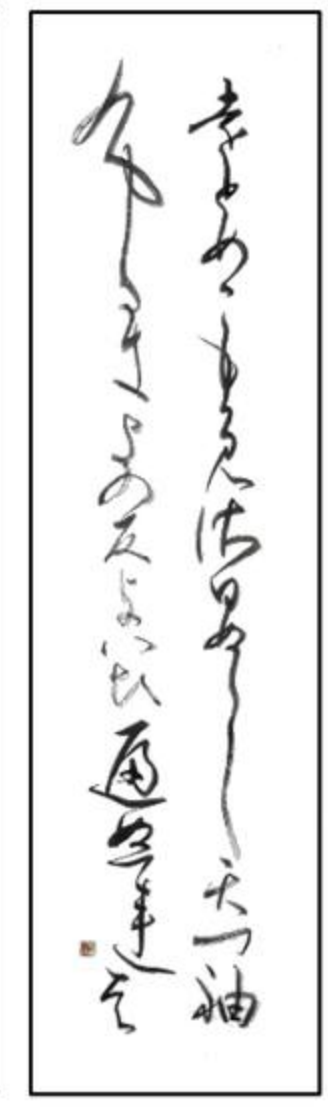
36

原田拓実　四回生

創作　かな　『源氏物語巻名歌「少女」』　半切　二連

「をとめごも神さびぬらし天つ袖古き世の友よはひ経ぬれば／日影にもしるかりけめやをとめごが天の羽袖にかけし心は」

久々に書いて大字かなの楽しさを再認識。修士でも続けていきたいですねー。





37

平井達也　三回生

臨書　篆書　徐三庚『出師表』　全紙

「臣亮言先帝創業未半而中道……（略）」

篆書半端ないって。あいつら半端ないって。どんな漢字でもめっちゃ可愛くするやん。そんなんできひんやん普通。（篆書の良さを感じて頂ければ幸いです。）



38

藤井基弘　博士修了

臨書　篆書　鄧石如『白氏草堂記』　全紙

「積石嵌空奇木異竹蓋覆其上緑陰蒙々朱実離不知其名四時一色」

今回初めて篆書に挑戦します。鄧石如は篆書の中興の祖と言われている人で、この人の作品を選んで興奮しています。私の研究はフィールドに出るので、この釈文はピッタリ研究に沿っています。



39

村上友梨　三回生

臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切

「天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大俯察品」

書の最高峰と名高い蘭亭序を臨書しました。シンプルながらも、独特のバランス感のある文字を表現するのが難しかったです。

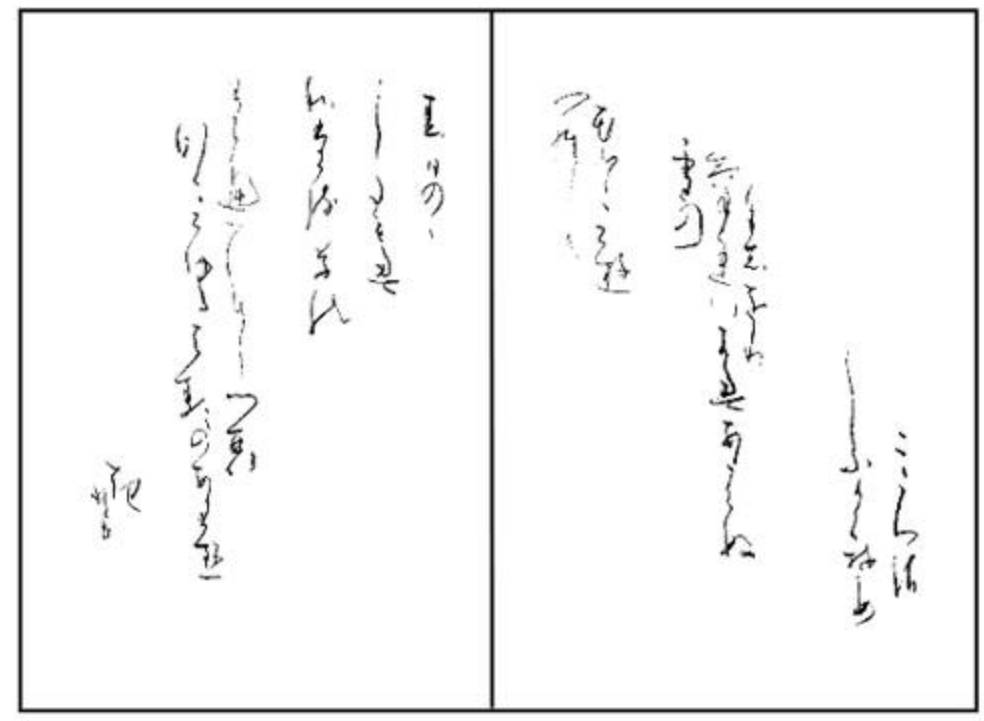


40

矢野凱己　修士一回生
創作　かな　『春を待つ』　全懐紙横

「こころざし　ふかくそめてし　をりければ　きえあえぬ雪の　花とみゆらむ／春日野の　したもえわたる　草のうへに　つれなくみゆる　はるのあわゆき」

仮名をやっていて一番楽しい瞬間は、書き終わって全体をながめたときに空間の美が自分好みにピタリとはまるときである。行の長さや行間が流れを作り、余白が作品の雰囲気をつくる。それらが絶妙に絡み合って調和し、僕のテンションはピークに達する。これだから仮名はやめられない。

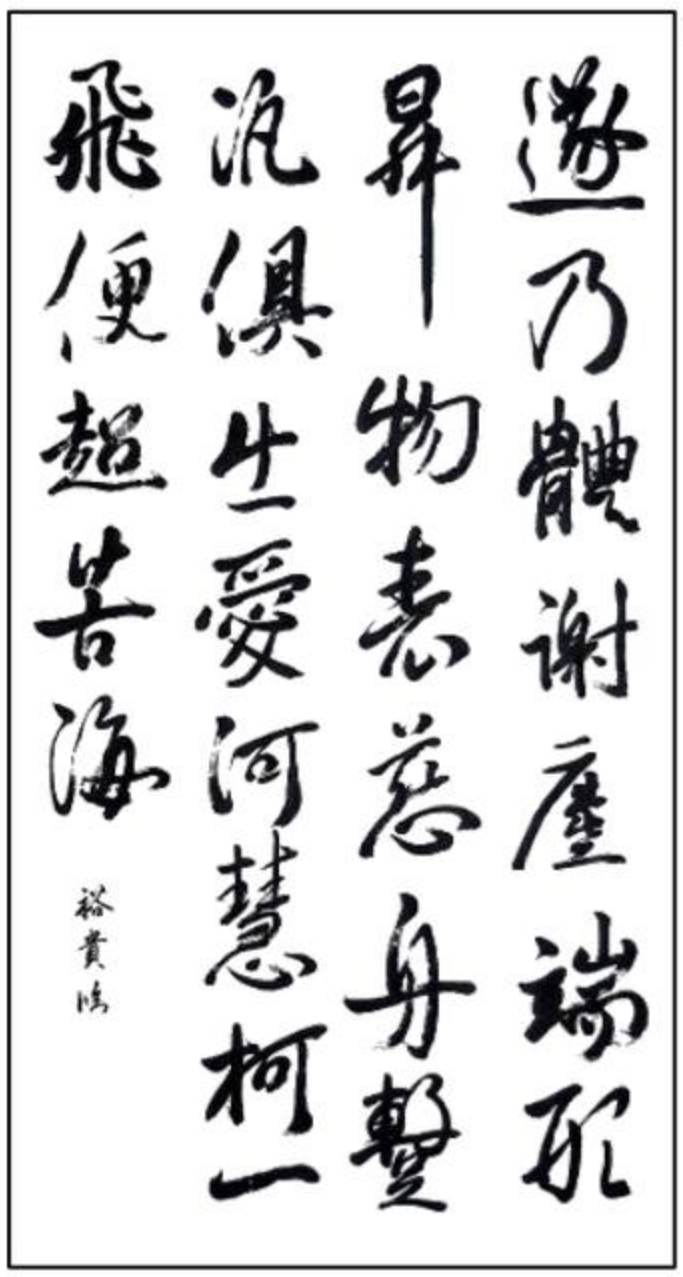


41

渡部裕貴　一回生
臨書　行書　橘逸勢『伊都内親王願文』　全紙

「遂乃體謝塵端。形昇物表。慈舟蹔汎。倶出愛河。慧柯一飛。便超苦海。」

気づけばもう冬。書道部に入って半年が経っていました。時間が経つの、はやない（逸勢）！？



42

全体合作
創作　『平成三十年間を振り返ろう』

今回の冬樟展は平成最後の書展という事で、平成の出来事を三十年分まとめました。表面のヒントを見ながらどんな出来事があったのかを皆さんで振り返りましょう！

43

二回生合作
創作　『くじ引き書道』

二回生それぞれがくじを引いてランダムで決まったお題に合うように漢字を書きました。お題にあった雰囲気になっているか、お楽しみください。

44

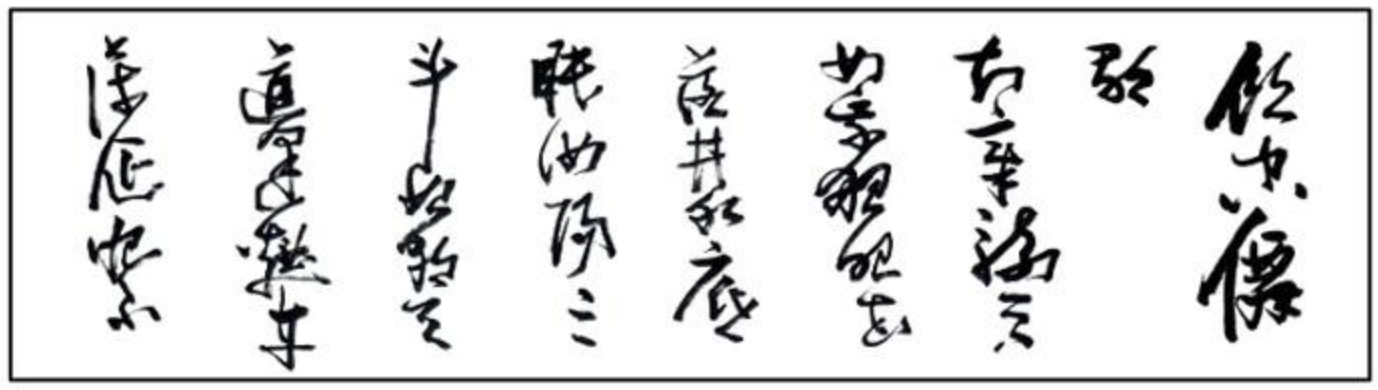
四回生合作
創作　行草書　『闊歩』

振り返ると、励まし合い切磋琢磨した四年間だった。互いの才能や個性を尊重し合ってきたからこそだろう。「闊歩」というテーマ、それぞれの詩は私たちの決意だ。これから、どんな未来が待ち受けているのか分からない。しかし、仲間と過ごした日々を糧にして自分の道を切り開いていきたい。私たちの旅路は始まったばかりだ。

○禅居庵

45

安達光寿　三回生
臨書　行書　張瑞図『杜甫飲中八仙歌巻』　巻子

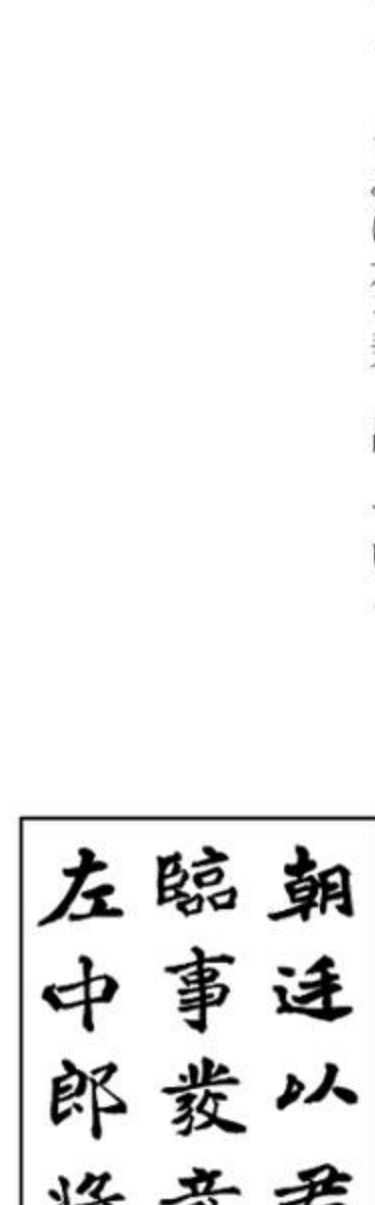


「飲中八僊歌　知章騎馬如乗船。眼花落井水底眠。汝陽三斗始朝天。道逢麴車口流涎。恨不……（略）」

「量の多過ぎる酒、少な過ぎる酒」。「そのとおりだ。だが、賭けはしなければならない。勝手にどうでもできるということではないのだ。もうきみは舟を乗り出している。さあ、どちらの側をとるつもりか」。

46

石本森羅　二回生
臨書　楷書　作者不詳『崔敬邕墓誌銘』　半切



朝廷以君膽思凝果善謀好成臨事裁奇前略無滯徴君拝為左中郎将大都督

「朝廷以君膽思凝果。善謀好成。臨事發奇。前略無滯。徴君拝爲左中郎將大都督（中山王長史。）」

六世紀の北魏でつくられた墓誌銘の臨書です。鋭さとしなやかさの入り混じる独特な魅力にひかれました。南北朝時代の楷書はすでにいくつか作品にしていますが、どれも人間的でありながらそれぞれに違った表情をもっていて、見ていて飽きることがありません。

47

今村朱里　四回生
臨書　隷書　趙之謙『隷書開元占經』　全紙



太素之先幽清元靜冥默帝象廓中惟靈廓外惟無如是久焉斯以溟涬蓋刀道之根根

「太素之先幽清元……蓋之道之根根」

いよいよ学部で最後の作品になります。自分のスタイルをあまり変えずに好きな作品を書きました。やっぱり書道部が好きです。

48

岩田恵理子　一回生
臨書　草書　王羲之『十七帖』　半切

「十七日先書郗司馬未去即日得足下書爲慰先書以具示復數字吾前東粗足作佳觀吾爲逸民懷久矣足下何以等復乃此似夢中語耶無緣言面爲歎」
草書に初チャレンジしました。今まで行書しか書いたことがなかったので新鮮な気持ちで書けました。



49

牛田聡美　二回生
臨書　行書　王羲之『九月三日帖』　半切

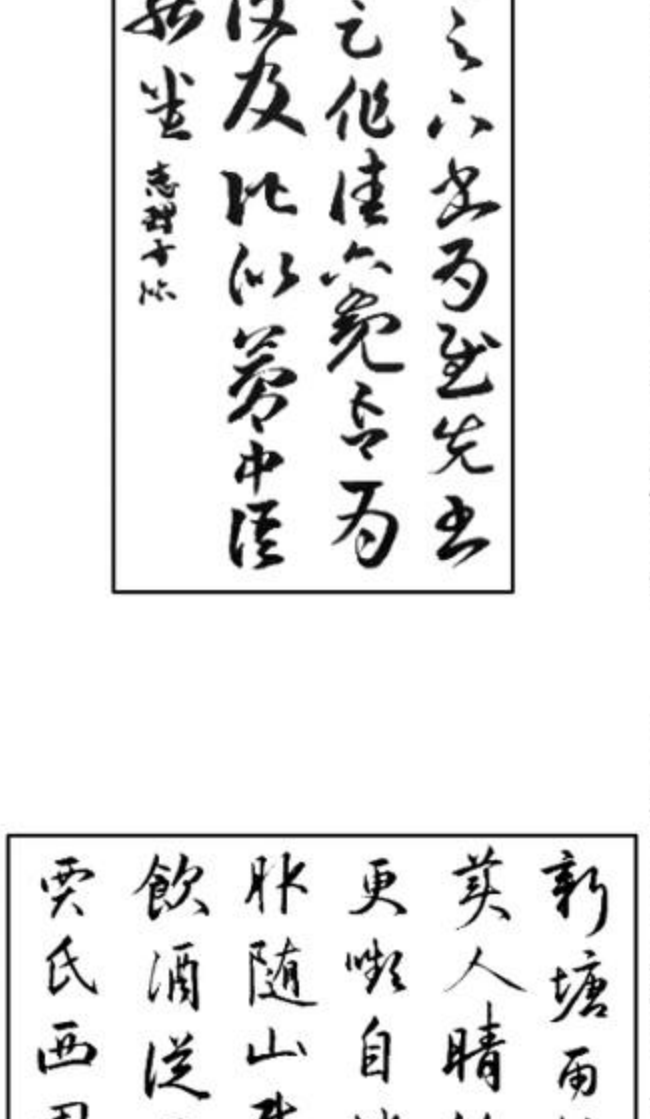
「九月三日羲之報敬倫遮諸人去晦祥禫」
最初に誕生日が出てきたので、「これは書かねば」と思い、初めて行書に取り組みました。ご批評よろしくお願いします。

NO IMAGE

50

大橋葵　二回生
臨書　行書　俞和『自書詩』　全紙

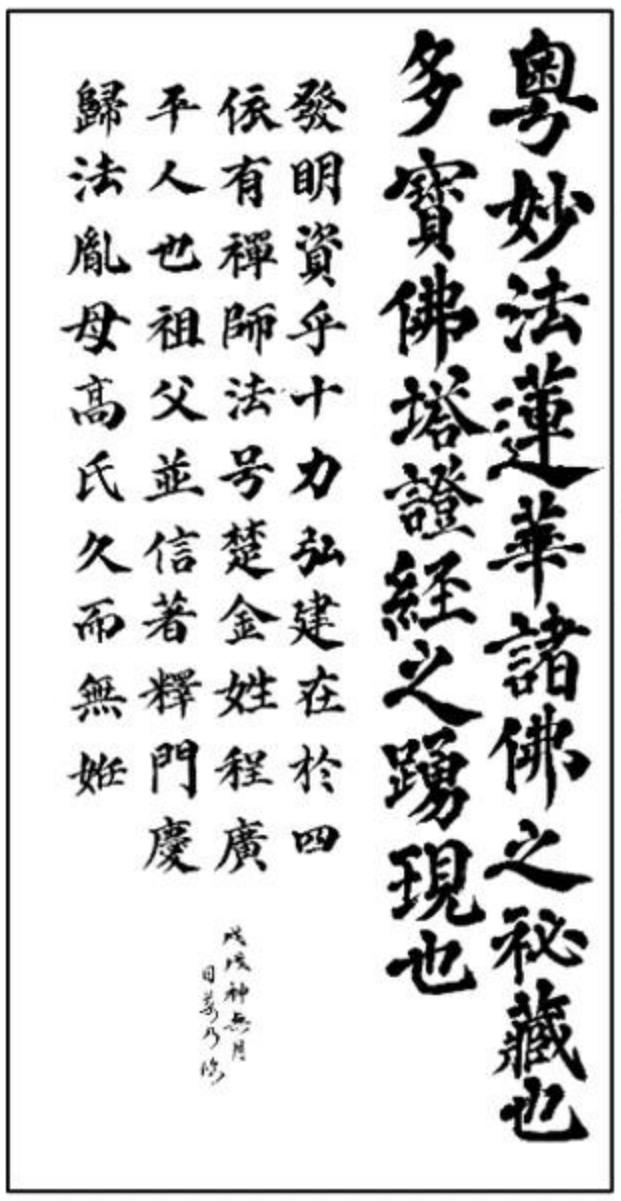
「新塘雨餘流水新、隔窓看花如美人、晴絲冉冉隨浪起、幽鳥嚶嚶啼……（略）」
かなり気に入ったので楽しかったですが締切前は嫌いになりそうでした。でも今見たらやっぱり好きです。



51

小野日菜乃　四回生
臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　全紙

「粤妙法蓮華諸佛之秘蔵也多寶佛塔證經之踴現也発明資乎十力……（略）」
『多宝塔碑』は、現存する顔真卿の作品の中で最も若い頃のものとされており、彼らしい肉太で力強い点画の中にも、しなやかさや品が感じられます。おそらく学生として最後の書展になるであろう今回、己の書道のルーツともいうべき顔真卿の、その書法の萌芽が見られるこの作品を題材に選びました。



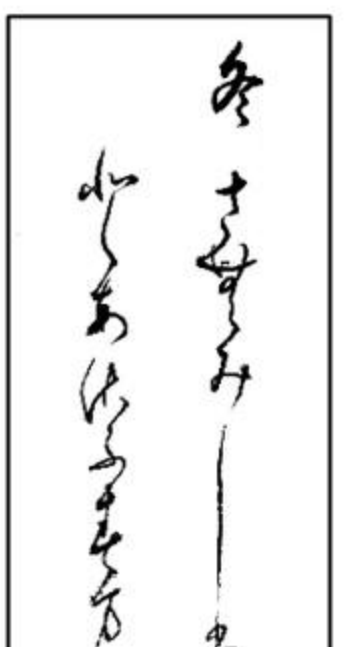
52　金岡杏祐　三回生
臨書　行書　褚遂良『文皇哀冊』　半切
「銅池而拊膺迫宗祧之是寄傷往駕之無憑奠樽盈而悲序促靈景翳而愁雲興去劒滋遠清徽」
法帖の転折の格好良さに惹かれて臨書しました。法帖があまり崩れていない行書なので、特に右ハライ・右ハネを抜かずに最後まで意識して書くように心掛け、全体として整った印象を与える作品を目指しました。



53　金山優作　三回生
創作　調和体　『あだし野』　聯落
「誰とても留まるべきかはあだし野の草の葉ごとにすがる白露」
あだし野を詠った西行法師の和歌を書きました。諸行無常の世の中で儚い命をもって如何に生きていきましょう。



54　金山優作　三回生
創作　かな　『冬の朝』　短冊
「冬さむみ霜さゆる夜も明けぬれどあさぶすまこそぬがれざりけれ」
ふとんから出たくない。



55　岸根葵葉　一回生
臨書　隷書　作者不詳『乙瑛碑』　半切
「傅于罔極。可許。臣請魯相爲孔子廟置百石卒……（略）」
書道を始めて初めての冬が来ました。今回は隷書に挑戦してみました。初めはかわいらしいと思っていましたが、書けば書くほど鬼の面が現れて来て、なんだか楽しいです。作品の完成度としては、まだまだ至らない部分がたくさんです。これからじっくり向き合っていけたらいいなと思います。



56

北田綾　一回生

臨書　行書　王羲之『集字聖教序』半切

「松風水月未足比其清華仙露明珠」

今回で二回目の展覧会で、前回は楷書だったので今回は行書にして、比較的書きやすそうなものを選びました。華や月や風など自然を感じる単語が多くて一目惚れしました。



57

越田真由　二回生

臨書　金文　作者不詳『虢季子白盤』　全紙

「隹十又□正月初吉丁亥虢季子白乍……（略）」

カラフルな飴玉がコロコロ転がっているような可愛い雰囲気が出てれば勝ち。



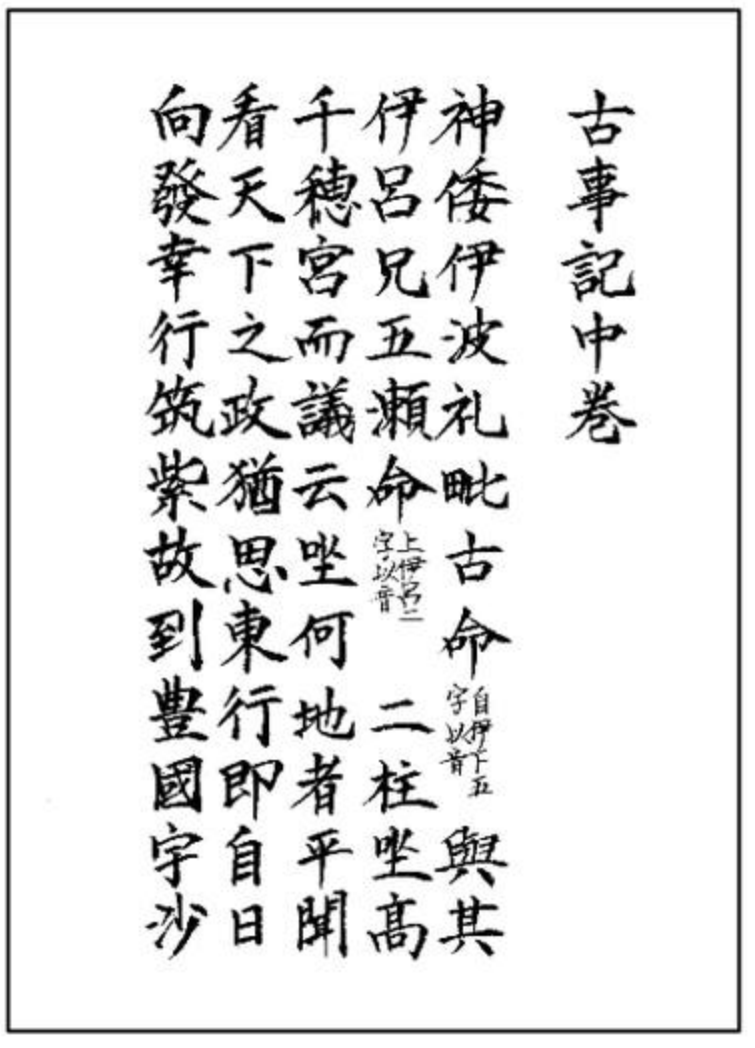
58

米田景　四回生

創作　楷書　『古事記』　半紙四枚

「神倭伊波礼毗古命與其伊呂兄五瀬命二柱坐高千穂宮而議云坐何……（略）」

あっという間の四年間。次の四十年も短いのだろうか、それとも長いのだろうか。



59

坂崎亜実　一回生

臨書　隷書　作者不明『礼器碑』　半切

「惟永壽二年。青龍在涒歎。霜月之靈。皇……（略）」

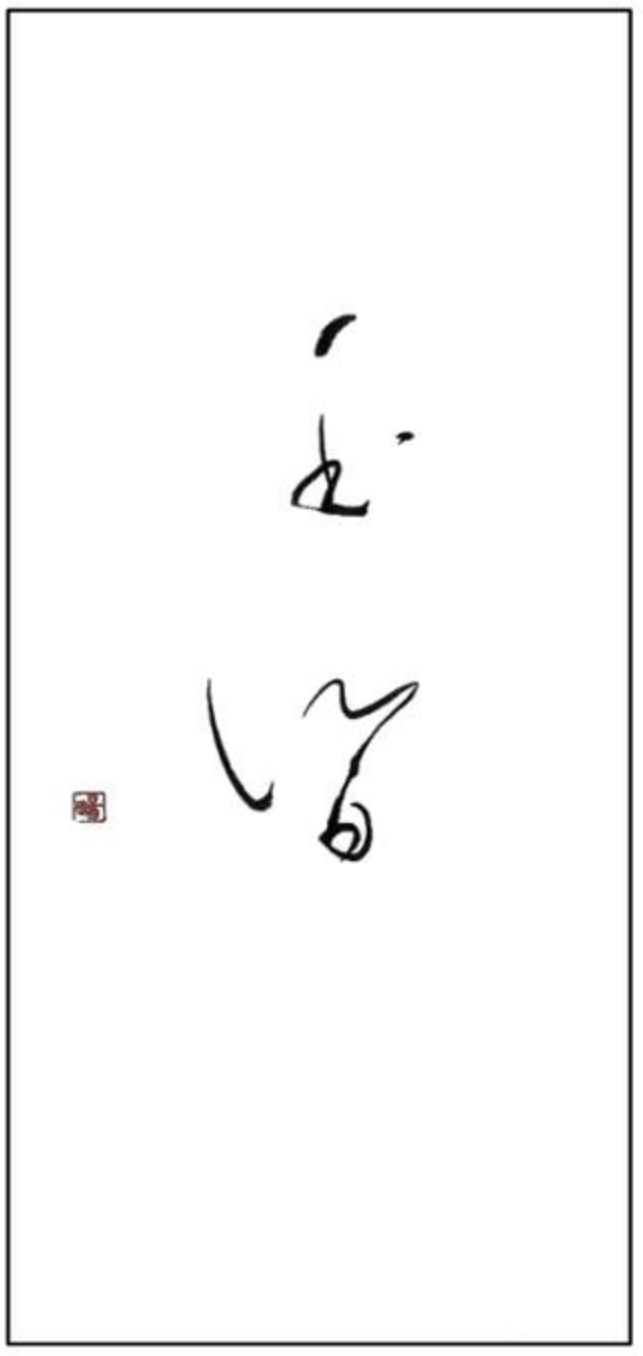
礼器碑は大学に入って初めて臨書しました。隷書大好きです！



60

白谷暢浩　修士二回生
創作　草書　『玉響』　全紙四分の一

「玉響」
玉が触れ合い音が響く一瞬のことを、玉響といいます。この日々は夢のように朧げで、しかし確かに響き続ける、宝物の記憶となりました。



61

洲鎌英行　一回生
臨書　行書　劉墉『文語幅』　聯落ち

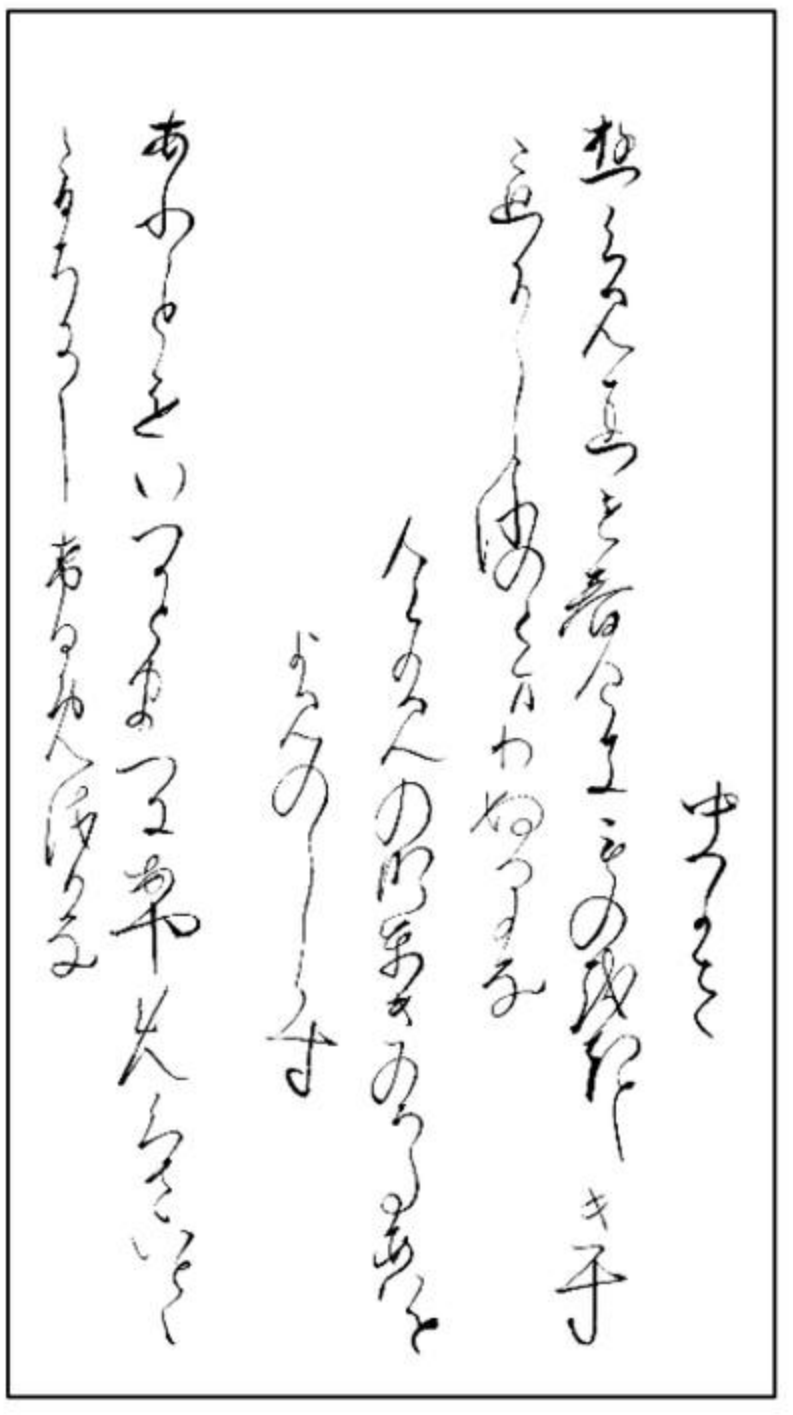
「蒸以靈芝……（略）」
法帖の丸々太った字が可愛かったので、臨書しようと思いました。



62

杉山太郎　一回生
臨書　かな　伝小大君『香紙切』　全壊紙

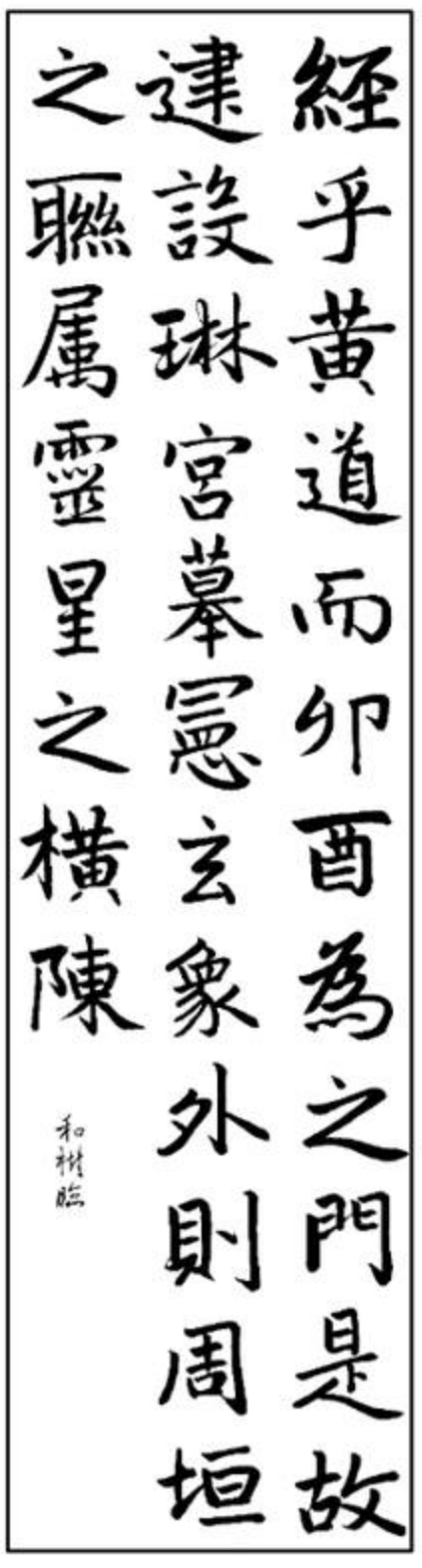
「ゆくみちも……（略）」
髪の毛のような細い線が可愛かったので挑戦してみました。



63

鈴木和樹　一回生
臨書　行書　趙孟頫『楷書玄妙観重脩三門記巻』　半切

「經乎黄道。而卯酉爲之門。是故建設琳宮。墓憲玄象。外則周垣之聯属。霊星之横陳。」
字体を気に入り臨書しました。少しでも成長が見られれば良いなと思っております。



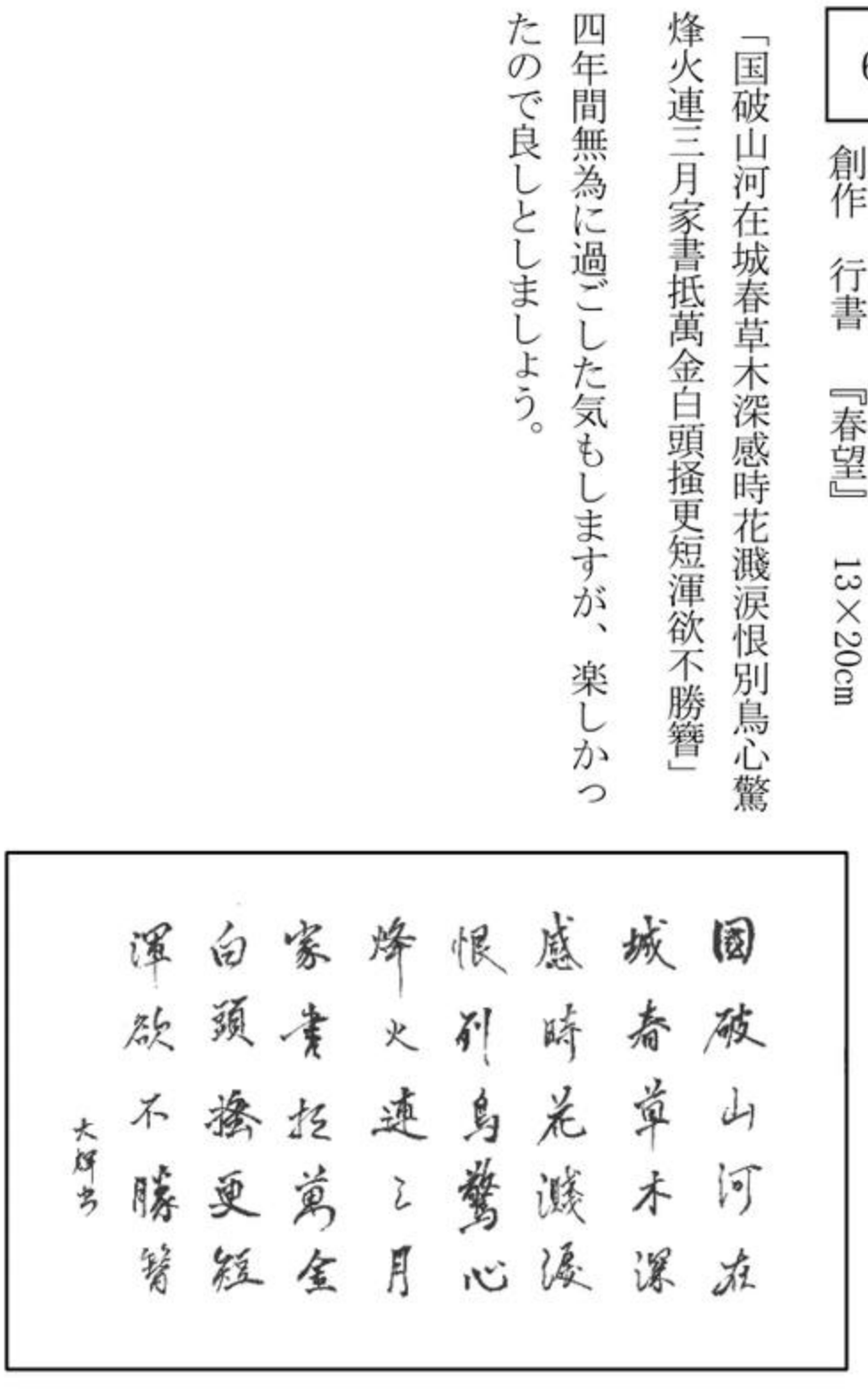
64

橘大輝　四回生

創作　行書　『春望』　13×20cm

「国破山河在城春草木深感時花濺涙恨別鳥心驚烽火連三月家書抵萬金白頭掻更短渾欲不勝簪」

四年間無為に過ごした気もしますが、楽しかったので良しとしましょう。



65

建部壮一郎　三回生

臨書　篆書　趙之謙『急就篇』　136×56cm

「進近公卿傳仆勛前後常侍諸將軍列侯邑有土臣封積學所致非鬼神」

じっくりと時間のかかる作品が書きたいと思い、篆書に挑戦しました。趙之謙の作品もいつか臨書したいと思っていたので、まさに今書きたかった作品です。



66

中岡大吉　二回生

臨書　行書　米芾『蜀素帖』　半切

「青松本無華安得保歳寒龜鶴年」

シュッとした感じ。



67

仲村康太郎　四回生

創作　隷書　『米芾のことば―「海岳名言」より』　半切縦四分の一

「一日不書便覺思澀」

『海岳名言』は米芾が残した断片的な文の寄せ集めである。欧陽詢・柳公権を「醜怪悪札の祖」、顔真卿の楷書を「俗品」というなど、直截的で痛快な辛口批評でも知られる。同書に、「一日書せざれば便ち思の渋るを覚ゆ。」という文がある。古人にとって筆を持つのは日常であるから、ここでは特に書を書くことをいうのだろう。



半切横二分の一

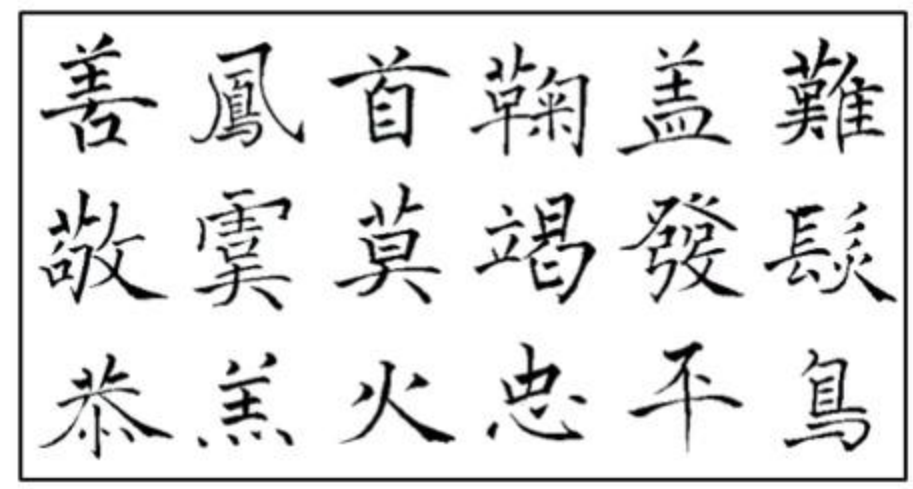
68

中村直樹　四回生

臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切

「難髪鳥盖發平鞠竭忠首莫火鳳羔虞善敬恭」

書道部に入って最初に書いた作品をもう一度臨書してみました。練習にあたり、合宿で先輩方からアドバイスをいただいたことを含め色々なことを思い出しています。迷惑をかけることばかりでしたが、多くの方によくしていただいて「ほんとに運がいい」という感じでしょうか。素敵なサークルに巡り合えたんだと思います。



69

中村勇真　三回生

臨書　楷書　盧中南『南郷子　登京口北固亭有懐』　半切

「何処望神州満眼風光北固楼千古興亡多少事悠悠不尽長江滾滾流年少万兜鍪坐断東南戦未休天下英雄誰敵手曹劉生子当如孫仲謀」

中国の現代書家、盧中南の作品を臨書しました。柔らかい楷書を書こうとすると、ただ弱々しいだけの楷書になってしまいます。未熟です。



70

橋詰都　四回生

創作　篆刻　『暮雲春樹』　葉書

「暮雲春樹」

この四字熟語は、杜甫の詩「春日憶李白」からできた言葉で、ざっくり言えば「遠く離れてしまった愛しい友を懐かしむ」という意味です。四月から京都を離れる皆さんへの気持ちと重ねて。またいつか一緒にお酒でも飲みましょう。

NO IMAGE

71

服部佳乃子　一回生

臨書　行書　王鐸『行書幅』　半切

「東俾公春集太峰齋中書十餘幀頗覺爽豁。爰驚顛沛乃得優遊燕汧。昨年江筮安得有此歟。」

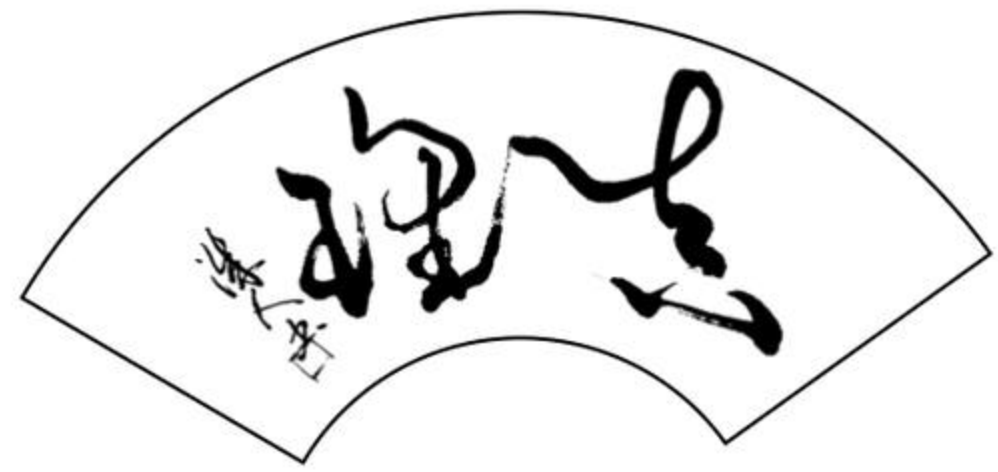
初めて王鐸の作品を臨書しました。うねうねしていて楽しかったです。



72

原 誠人　四回生
創作　草書　『眞理』　扇面（九寸）

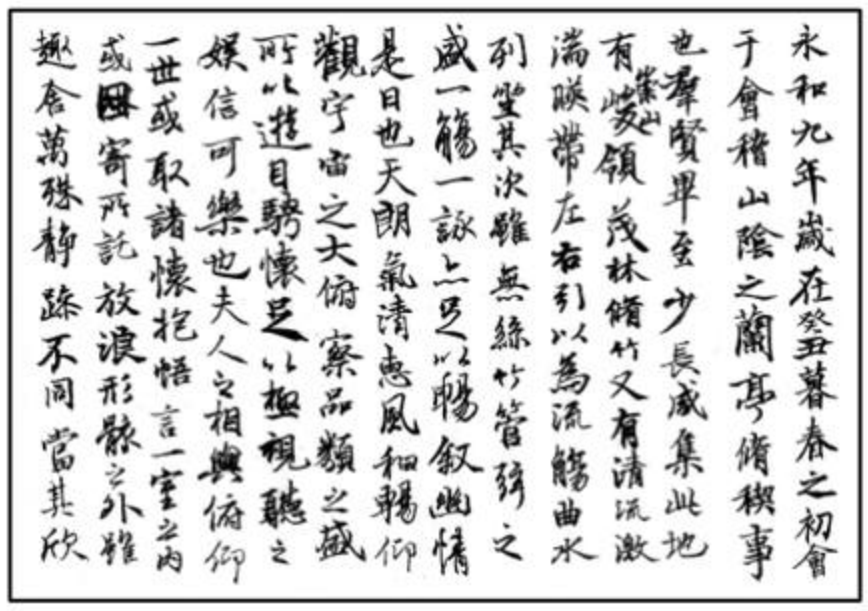
「眞理。」
大学生だった私に。



73

原誠人　四回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　パネル

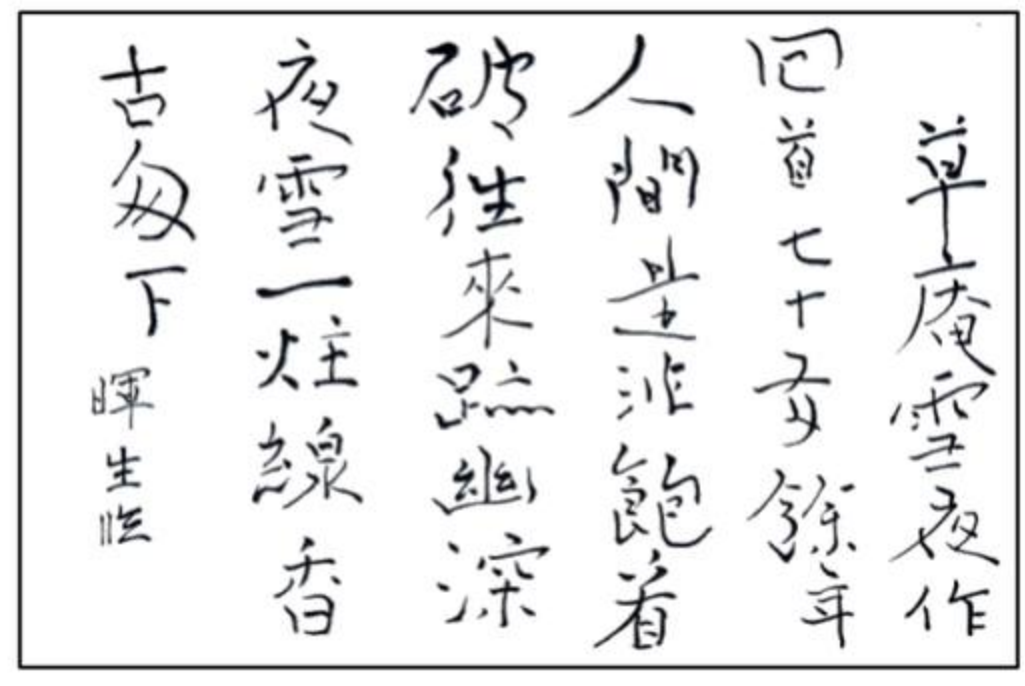
「永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。群賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻領、茂林脩竹。又有清流激湍、暎帯左右。……（略）」
数多の伝説に彩られた書史永遠の最高傑作、蘭亭序。臨模刻本の奥にいるはずの真蹟なき書聖・王羲之（＝書のイデア？）に、どれほどの先人たちが憧れてきたことか。私にとって見えないモノへの道のりはあまりに遠く、されど四年間を総括するに「蘭亭」の「原寸全臨」に如くはなく、故に〈中間発表〉致します。御笑覧下さい。



74

一二暉生　三回生
臨書　楷書　良寛『草庵雪夜作』　全紙三分の一

「草庵雪夜作　回首七十有餘年　人間是非飽看破　往來跡幽深夜雪　一炷線香古窗下」
前回に引き続き、良寛の書です。夏季休暇中に書家、村上三島の記念館に行き、そこで見た独特な味わいのある書が非常に好みでした。村上三島は良寛の書をよく研究していたということだったので今回挑戦してみたのですが……。やはり、難しいですね。



75

別府華　三回生
臨書　篆書　比田井天来『無功徳』　半切

「無功徳」
見返りを求めてしまいがちの自分を改めようと思い、書いてみましたが、特に変わらない気がします。



76

松尾有輝也　二回生

臨書　行書　趙孟頫『秋興八首』　全紙横

「斜毎依南斗望京華聴猿実下三聲涙奉使虚随八月査畫省香爐違伏枕山樓粉」

がんばりました。



77

森ちひろ　三回生

臨書　篆書　鄧石如『周銘横披』　34.8cm×72.8cm

「戦々栗々　日謹一日　人莫躓于山　而躓于垤」

釣り針みたいな「于」の形と作品のサイズ感に一目惚れして選びました。前回、篆隷合作をしてから篆書の魅力に取り憑かれてしまったようです。



78

山科直也　修士一回生
創作　調和体　『スピカ』　半切

「幸せは途切れながらも続くのです」
今日もご飯がおいしい。それってすごい大事。

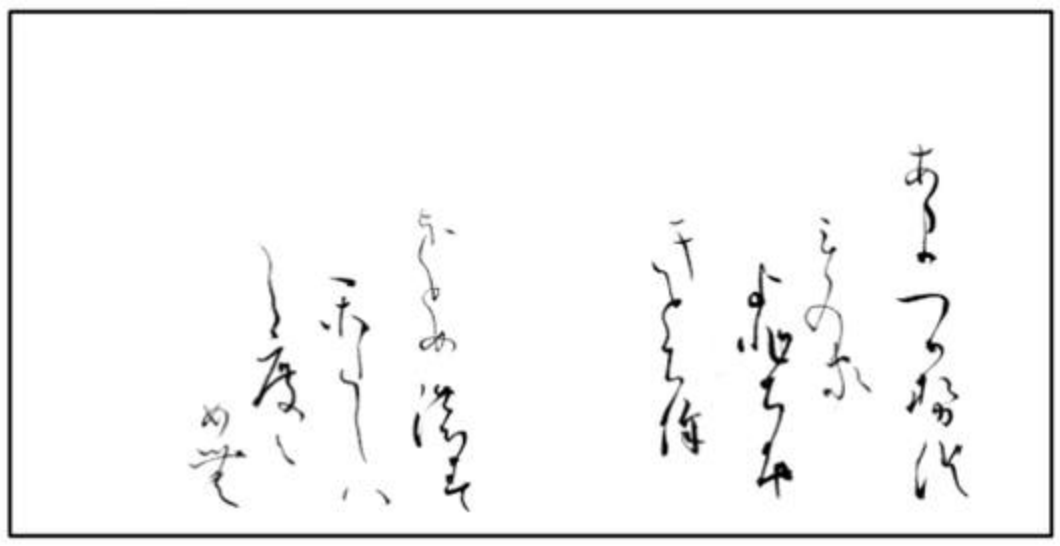


79

吉田凌祐　二回生
臨書　かな　伝小野道風『継色紙』　13cm×26cm

「あまつ可（か）勢（ぜ）倶（く）毛（も）の家（か）よ非（ひ）ぢ布（ふ）きとぢ餘（よ）をと め濃（の）春（す）閑（が）多（た）し八（ば）し度（と）ゝめ無（む）」

百人一首にも採録されている有名な僧正遍照の和歌です。漢字作品とは違い、余白を楽しむのが「かな」の世界です。この「継色紙」は「三色紙」といわれるかな古筆の傑作のひとつとして知られています。皆さんも日本の生み出した二次元の美の世界に浸りませんか？

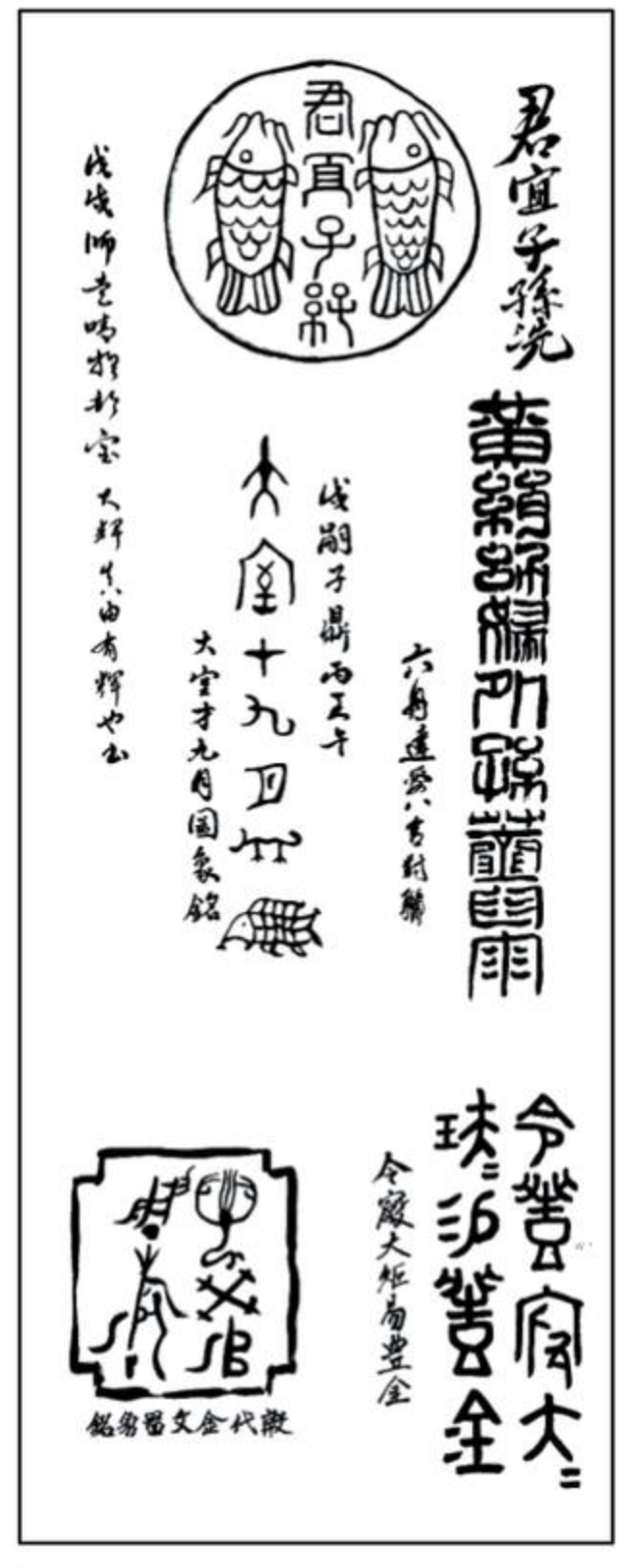


80

鵜川大輝　二回生　・　越田真由　二回生　・　松尾有輝也　二回生
創作　篆書　『篆書パッチワーク』　聯落

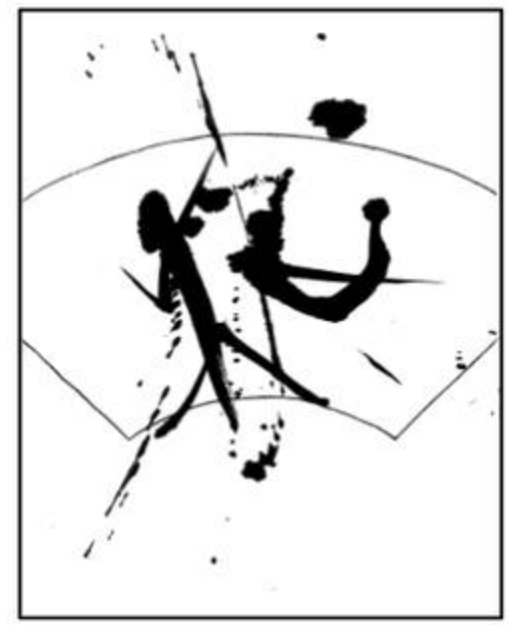
「君宜子孫洗……（略）」

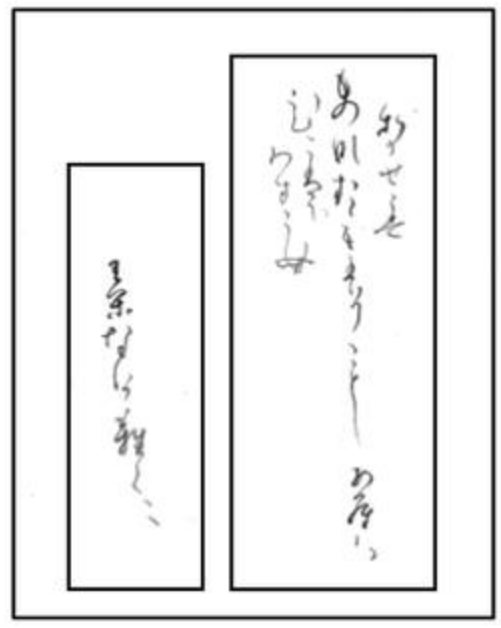
初夏書展で可愛い楷書を書いた二回生屈指の可愛い三人が、今度は可愛い篆書を書きました。



81

木下有羽　修士一回生　・　矢野凱己　修士一回生　・
山口和樹　修士一回生　・　野田恵子　二回生
創作　行書・かな　『環』　聯落







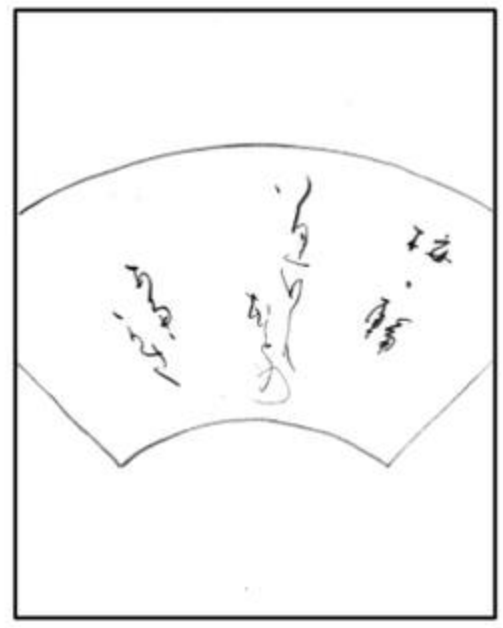
「廻」「和」「梅一輪いちりんほどのあたたかさ」「我が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我がなけなくに」「壽似春山千載秀福如滄海萬年清」「閑雲野鶴心同靜瓶水爐香意自如」

尊敬する先輩方との合作です。教えていただいた時間も含めて、この作品は私の宝物です。（文章：野田恵子）

82

小林由佳　四回生　・　平野晶子　四回生
創作　隷書　『踐修厥猷、春日憶李白』　屏風







「踐修厥猷、白也詩無敵飄然思不群清新庾開府俊逸鮑參軍渭北春天樹江東日暮雲何時一樽酒重與論細文」

踐修厥猷とは「慎み深く賢明で物事に通じた皇帝の偉大な道を実践し修める」という意味で、詩は、杜甫が友人の李白のことを深く思う気持ちを書いた詩です。約四年間一緒に書道を続けてきた二人で、お互いへの感謝やこれからも頑張ろうなどの想いも込め合作に取り組みました。

【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科教授　宇佐美文理
京都大学人文科学研究所図書掛　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書道家　寺本蒼玄

一回生

理　秋友祥香
総人　伊藤迅亮
農　岩田恵理子
農　小笠原萌葉
医　岸根葵葉
工　北田綾
工　坂崎亜実
農　柴田達哉
工　洲鎌英行
文　杉山太郎
工　鈴木和樹
工　陳鵬旭
法　中村紀保子
工　野口直哉
農　服部佳乃子
工　渡部裕貴

二回生

文　石本森羅
工　市川拓真
工　鵜川大輝
文　牛田聡実
法　大橋葵
農　小池莉穂
工　越田真由
同志社　近藤佑香
法　坂本和歌子
文　寺田奈津美
同志社　中岡大吉
工　中林亮
同志社　野田恵子
法　星野孔伸
工　松尾有輝也
工　安田直記
法　湯宮颯太
理　吉田凌祐

三回生

法　安達光寿
工　今井彩帆里
工　覚道直治
京学　勝野初紀
法　金岡杏祐
工　金山優作
工　金祺民
工　邢書禹
医　佐山侑莉
法　建部壮一郎
理　中村勇真
医　野田智子
文　挾間優美
工　一二暉生
文　平井達也
ダム女　別府華
法　村上友梨
京女　森ちひろ
農　吉岡智志

四回生

工　阿部朱夏
医　今村朱里
法　上村香鈴
医　浦川真由子
法　小野日菜乃
工　郡健一郎
法　小林由佳
農　米田景
法　阪井田有紗
農　佐武千寛
文　角裕介
工　橘大輝
文　徳田寛生
法　仲村康太郎
文　中村直樹
文　橋詰都
工　原誠人
理　原田拓実
工　平野晶子
同志社

五回生

医　岡本晴香
府医　木高早紀

修士一回生

農　木下有羽
医　下坂桃代
人環　薛楽
薬　竹内春佳
工　ハンナ
情報　バファウェイ
人環　深谷拓未
農　堀場菜摘
法　三村祐貴
工　宮部大志
工　矢野凱己
工　山口和樹
工　山科直也
工　渡辺顕

修士二回生

農　新井一矢
薬　荒巻拓哉
理　上西隆太
工　牛山泰喜子
工　閻姝恒
工　角谷遊野
農　釜阪紘平

工　藏岡凌平
大教　島津七明
工　白谷暢浩
工　宗哲仁
理　疋田研一郎
農　方伯軒
農　柳本圭介
人環　山脇謙

修士四回生

情研　プリースナー

博士二回生

法　大泉陽輔
医　川上澄香
薬　シュミッド

博士課程修了

地環　藤井基弘

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ http://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町３７
TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島 5-14-6 クレセントビル 2F
TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 164
TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802
書遊松島堂 〒320-0058 栃木県宇都宮市上戸祭 3-2-25
TEL.028-678-6705／ FAX.028-678-6551
書遊札幌アメミヤ店 〒060-0061 札幌市中央区南一条西２丁目５南一条 Kビル5F
TEL.011-398-9400／ FAX.011-398-9401

京都・書道用具店
松楳園
一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。

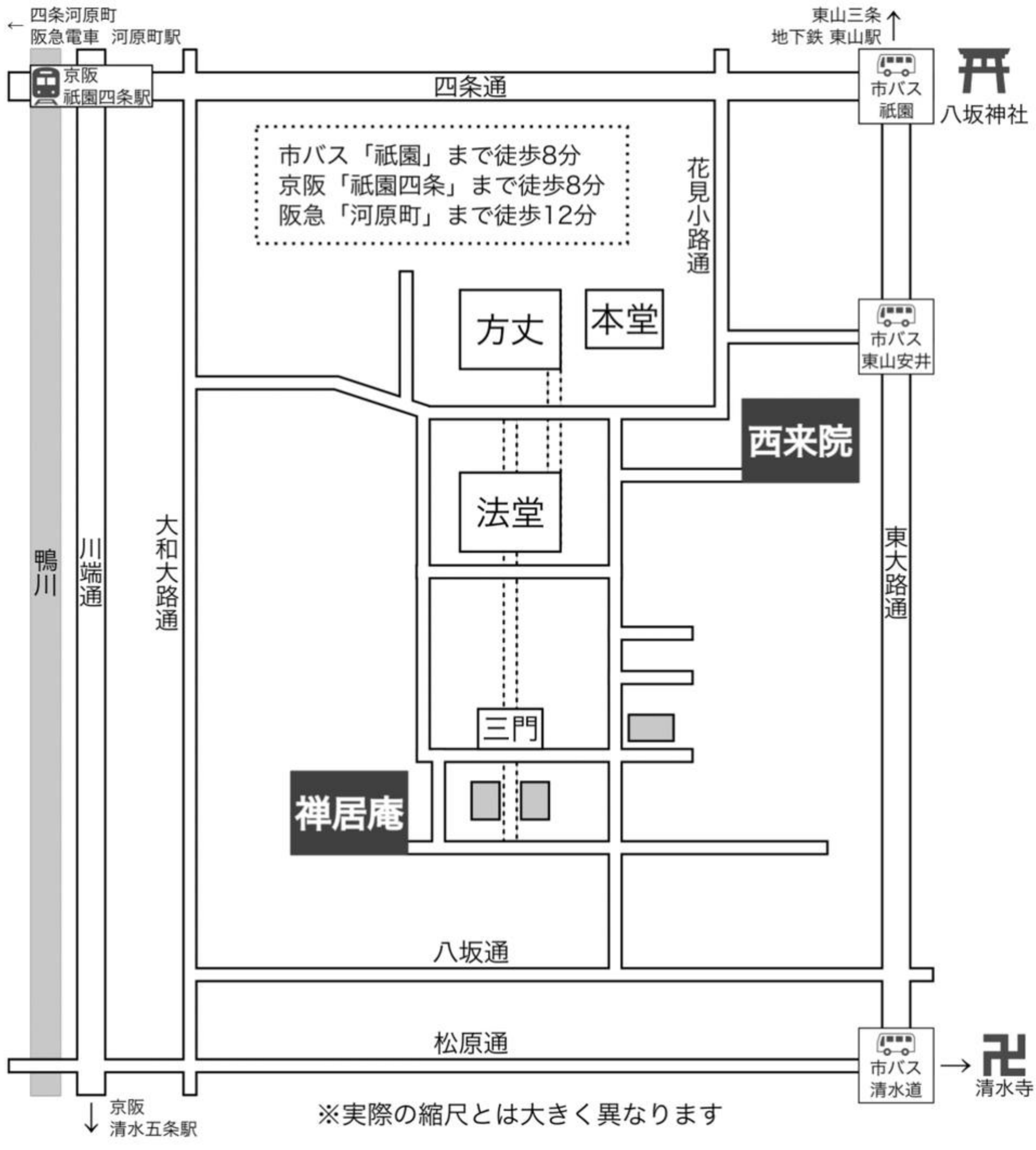
取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006
http://:www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路
上ル下本能寺前町 520
営業時間 10～18 時 定休日(日曜日)
TEL. 075(231)0510 FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車 5 番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

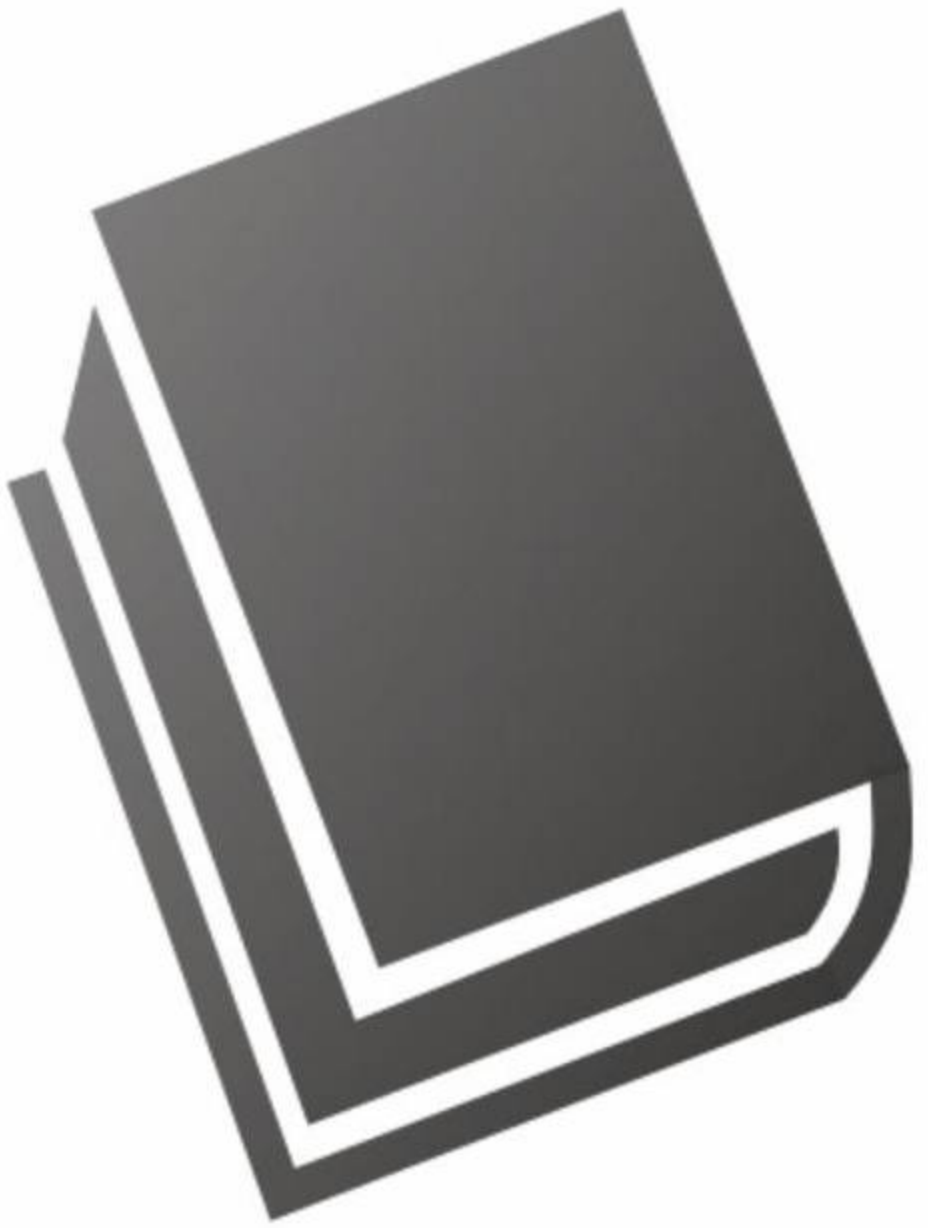
文具四寶 (筆・墨・硯・紙) 和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 贊交
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
URL：http://www.shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME